

5 現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6 本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、(マヽ)と記した。

○ 資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「わかな」、ことばとうたをもて、まきの名とす。源氏三十九歳のふゆより四十一歳の春まで。

一、「朱雀院のみかど、ありしミゆきのゝち」とハ、六条院に行幸ありしころほひより、なやませ給へる也。「もとよりあつしく」とハ、重病の人にておハしますの心也。此たびの御なやミを心ほそくおほしめさるゝ也。「をこなひのほいふかき」とハ、御出家ありたきの心也。

一、「きさいのミやおハしました」とハ、あしきさきのおほしめさん事によりて、御出家をおやかうゝのため、おほしめしとゞまりたるの心也。「なをそのかたに」とハ、出家の心にふかくおほし入たる也。

一、「御まうけ」とは、よをそむき給ふべき御心まうけし給ふ也。

一、「みこたち」とハ、朱雀院の御子ハ春宮をはじめたてまつり、をんなミヤたち四所おハしましたける。その中に、藤つぼの御はらの女三の「オオミヤをとりわきてかなしうし給て、源氏にゆづり給はんとおぼさるゝ也。「藤つぼ」ハ、入道のミヤの御いもう、せんでいのひめミヤ也。

一、「まだばうときこえさせ給しときより」とハ、朱雀院のまだ春宮と

申たてまつりし時より、藤つぼまいり給へりし也。

一、此藤のミヤの御はゝハ、せんでるのかうるにて、とりたてたる御うしろミなどもなかりしゆへに、朱雀院にまいり給ても、あしきさきのおぼる月の内侍のかミとりもち給しに、をされてすぐし給へりしかど、朱雀院ハいたハしき物におほされしその御はらの女三宮を、とりわきてかなしくし給へる也。そのほど十三四ばかりなり給へる也。

一、「いまハとそむきすて」とハ、朱雀院、よをそむき給はんのち、女三のミヤ、たれをたのもしき人にておハしまさんとおほしなげく也。(ヘソ)

一、「にし山なるミてら」、仁和寺也。仁和年中にたてられる也。光孝てんわうのすませ給してら也。それを朱雀院のつくらせ給ふと、かきなしたる也。

一、「又このミヤの御もぎ」とハ、女三のミヤの御もぎをいそがせ給ふ也。

一、「院のうち」とハ、朱雀院うちにやんごとなくおほさるゝみたから物、御てうど、もてあそび物まで、すこしもゆへある物ハ、みなこの女三のミヤにゆづり給て、そのつぎゝをことひめミヤたちにハ御せうぶんどもありける也。「せうぶん」とハ、物をわけてまいらせたまへる事也。所領をわくるも、せうぶんといへる也。

一、「春宮ハ、かゝる御なやミにそへて」とハ、朱雀院の御わづらひそへて、よをそむかせ給はんとし給ふときかせ給て、わたらせ給へる也。御はゝ女御も春宮にそひてまいり給へる也。すぐれてハ朱雀院々おほされざりし女御なれど、いまハ春宮にひかれ給てめでたくなり給ひければ、としごろの御物がたりなど、こまやかにきこえ給ふ也。

一、「ミヤにも」とハ、春宮にも、よをたまたせ給ふべき御心づかひの

給也。

一、「御うしろミども」とは、春宮に源氏の御ひめぎミをはじめ、こなたかなたより御うしろミまいらせられ給たれば、かるくしからずおハしませば、うしろやすく朱雀院おほさるゝと也。

一、「女ミやたち」とハ、朱雀院ひめミやたちあまたおハしますゆくすゑおもひやるが、さらぬわかれにもほだしならんと給ふ也。「さらぬわかれ」とハ、なくならんミちのさまたげともなるべきの心也。

一、「さきくくのうへに」とハ、むかしの人のうへをきゝしにも、女ハ心よりほかに、人におとしめらるゝすぐせある物なれば、いづれのひめミやたちをも、くらいにつかハせ給ひたらんミよにハ、御心とめておぼしめしたづねよ、との給ひしらせ給ふ也。「三のミヤ」とハ、女三のミヤ、いとけなきよハひにて、われひとりをたのもしくおぼさるゝを、うちすてんのちのよに、たゞよひさすらへ給ハんがかなしくおもふと、朱雀院の給ふ也。「たゞよひさすらへん」とハ、おちぶれ給ハんがかなしきと也。

一、「女御にも」とハ、せうきやうでんも、女三のミヤのこの給ひつけをかせ給へども、女三の宮のはゝ女御を、朱雀院人よりまさりて時めかし給へりしかバ、せうきやうでんいどミカハし給へりしかバ、女三の宮に心よせうしろミ給ハんとハせうきやうでんおほされじと也。

一、年くれゆくまゝに、朱雀院の御なやミおもくならせ給へる也。

一、「そのよにたのミかけ」とハ、朱雀院くらみさり給へども、むかしよりのミたてまつり給へりし人ゝハ、いまもつかへ給て御めぐミかうぶり給へる人ゝハ、なやませ給ひかぎりになり給へるを、おしミ奉り給ふ也。

一、六条院よりも、御とぶらひありし也。源氏ミづからもまいり給ふべきよし朱雀院きこしめし、よろこばせ給へる也。

一、「中納言のきミまいり給へる」とハ、夕ぎりまいり給へるを、朱雀院みすのうちにめしけれ給て、「古院の」と、きりつほのみかどの、御ゆいごんの中に、源氏の御事、冷泉院御事、の給ひをきしかど、みかどゝなりてハ、うちくくの心よせハかハラざりしかど、「はかななき事のあやまり」とハ、源氏をさせんし給ひつれば、そのうらみに心をかゝるゝ事もやと、年ごろ、ことにふれて、おもひしかど、うらみのこし給へるけしきもらし給ハざりしとの給ふ也。

一、「さかしき人」とハ、賢人といへども、身のうへになれば、心うごき、かならずそのむくひせんとおもふこといにしへだにおほかりしかバ、いかなるおりに、その心ばへみえんと、よ人もおもひつれど、つるに源氏のびすぐし給て、春宮などにも心よせ、「いまはた又なくしたしかるべき」とは、あかしのひめぎミまいらせ給て、春宮をかしづきおほす事心にハおもひながら、このミちのやミにたちまじハリ、かたなしきことばなど、中くにませしとよそのやうに思ひてすぐすと、朱雀院夕ぎりへの給へる也。

一、「うちの御事」とハ、冷泉院ハ御ゆいごんたがへづくにをゆづりをきしかバ、すゑのよあきらかなるきミにて、わがおもておこしにもおもふなど朱雀院夕ぎりへの給ふ也。

一、「この秋の行幸ののち」とハ、冬なれども、あきとの給ふハ、もみぢをもてはやし給へりし行幸なれば、あきと朱雀院の給ふ也。又、春あきといふときハ、なつハ春につき、あきハ冬につくゆへ也。

一、「たいめんきにきこゆべきこと」とハ、源氏にたいめんありて、の給はん事イオも侍る。かならずとぶらひ給ふべきやうに、夕ぎりもよほし給へと、朱雀院の給ふ也。

一、「中納言」とハ、夕ぎり過にしことハ、ともかくも思ひわきがたく侍り。「としまかりいりて」とハ、としつもり侍りて、よの中の事見給へありくにも、うちくくの物がたりにも、いにしへさせんありし

うらみなど、うちかすめても源氏のかたり給へるおりなど侍らずと、夕ぎり申給ふ也。

一、「しづかなるおもひをかなへん」とハ、ミヤづかへのがれてこもり侍るのちハ、古院の御ゆいごんのやうに、朱雀院になにごとにつけても、心ざしを見えたてまつらぬとこそ源氏うちに申給ふと夕ぎりそうし給ふ也。

(一)、「御くらるにおハしましし」とハ、朱雀院御即位のあひだハ、身のうつハ物もよはず、かしこき人々おほくましくて、ミヤづかへ申す事もなかりつると、源氏申給ふと夕ぎりそうし給へる也。「身のうつハ物」とハ、器量才覚也。「いままつりごとをさり」とハ、朱雀院よをのがれ給ておハしますころまいりて、心のうちへだてなくうけ給はらまほしきと、源氏申給ふと夕ぎりそうし給へる也。「所せき身のよそほひ」とハ、げんじ大上てんわうにあがり給へば、かろぐと御ありきもなりがたきと也。

一、「はたちにもまだわづかなる」とハ、夕ぎり十九歳なれど、よくと、のひ給たると、朱雀院御めとめて女三のミヤにやこれをあハせばやとおぼす也。

一、「おほきおとゞのわたりに」とハ、内府のむこになり給たるとき、しと朱雀院の給ふ也。「みゝやすき物から、ねたくおもふ」とハ、くものかりに本望とげ給たるときハ、みゝやすけれど、わがむこにとらぬがむねなると朱雀院の給ふ也。「みゝやすき」とハ、きよきの心也。

一、「あやくし思ひめぐらすに」とハ、朱雀院の綸言をおもふに、此女三のミヤをもてわづらハせ給ふ事をの給ハするかと、夕ぎりをはかり給へる也。

一、「さるべき人あらば」とハ、しかるべき人あらば、女三のミヤあづけをきて、朱雀院よをのがれんと、うち／＼の給へるとき、しと夕

ぎりの心也。

一、「ふと心得がほに」とハ、夕ぎり朱雀院の綸言を心得がほにハ御かへしいかゞ申さんとおぼして、はか／＼しくもあらぬ身にハ、よるべも侍りがたくとばかりの給ふ也。

一、「かの院のわがさかりにハ」とハ、源氏の御かたちハ、なずらひ給ふべくも、夕ぎりの御かたちハ、あらざりけりときこゆ也。

一、「まことに、かれハ」とハ、源氏ハさまことなり、ましていまはひかりくハ／＼りて、大上てんわうになり給ひたるなど、朱雀院ほめの給へる也。

一、「うるハしだち」とハ、実めだちてみれば、めもよはず、又うちとけてたハおれ事もいひかたらへば、にる物なくみえ給ふこそ、さ／＼ツきのよゆかしき人なれと、朱雀院源氏をほめ給へる也。

一、「ミヤのうちにひいで」とハ、源氏ハだいのうちにてそだち給て、帝わうのかぎりなくおほされつれど、心のまゝにもおごらず、はたちがうちにハ、納言にもならざりき。廿一のとしこそ宰相にて大将かけ給へりしと也。「なうごん」とハ、大納言・中納言をいへる也。「これはいとよなくすゝミたる」とハ、夕ぎりハことなくわんいたかくなり給たると也。つき／＼の子のおぼえのまさる也。かしこきかたハ、夕ぎり源氏にまさりざまなるとの給ふ也。

一、「あやまりても」とハ、おやにまさるハあやまのやうなれど、ゆふぎりのおぼえをよすけたるハ、げんじにまさりざまなると朱雀院ほめさせ給ふ也。

一、「ひめミヤのうつくしく」とハ、女三のミヤを見はやしたてまつり、かた／＼おひならんことをも、見かくしてをしへきこえんに、あづけをかまほしとおぼさるゝ也。「かたおひ」とハ、よくなりあひ給ハぬ事のふそくならん所を、をしへなどせん人にあハせたくおぼす也。

一、「おとなしきめのとゞもめしいで、女三のミヤのもぎの事を朱雀院の給ひあはするつゝみでに、「六条のおとゞの」とは、源氏のむらさきのうへおほしたてならハし給しやうに、女三のミヤあづからん人もがなど、たゞの中にありがたしとおほしわづらふ也。

一、「うちハ中宮さぶらひ給ふ」とハ、きんちうにハあきこのむ中宮おハします。つぎくくの女御たちとても、いとやんごとなき人々おハしませバ、うしろミなくて、中くならんなどきだめかね給て、此權中納言にや女三のミやあハせましなどおほす。「權中納言」とハ、夕ぎり也。「わかかれと」ハ、夕ぎりハきやうしやくにゆくすゑたのもしげなる人なるへつをなどゝの給ふ也。「きやうしやく」とハ、人のおひいで給ふさまのけだかき事也。

一、「中納言ハ、まめ人にて」とハ、夕ぎりハ、実めなる人にて、としごろくもるのかりに心かけ給て、よそにうつろひ給ふ心なくて、その思ひかなひ給て、ゆるぐ心も待るまじ。「かの院こそ」とハ、げんじハ、なを人ゆかしくおほさるゝ心たえざりければ、又その中にも、内親王をきたのかたにもち給ハぬを不足におほさるれば、ほのめかして御らんぜよとめのと申也。

一、「さきのさいるん」とハ、あさがほの齋院も、内親王とおなじくらゐにておハしませば、源氏心をかけ給へるなどゝ、めの朱雀院に申す也。

一、「いで、そのあだけこそ」とは、源氏ハあだくしく、こなたかなたに心をかけ給ふこそうしろめたけれと、朱雀院の給ふ也。

一、「あまたの中に」とハ、源氏に女三のミヤあづけ給ハ、あまたの北方の中にてめざましき事ありとも、やがておやさまにさだめて、さもやうゆづるべき、などもおほしよる也。「よづきてあらん」とハ、おとこにふれさせんとおもはんをんな子ハ、げんじのあたりにこそふれば、せまほしけれ。いくほどあるまじきいのちのほど、心

ゆくさまにてこそすぐさまほしけれ、などゝ朱雀院の給ふ也。「ふれば、せん」ハ、ふれさせんと也。

一、「われをんなならば」とハ、朱雀院はらからなりとも、をんなならば、げんじにむつびよらん。わかゝりし時ハ、思よりしなどゝの給ハする也。

(一)、「女のあざむかれん」とは、源氏にをんなのあなづられ、名をたてんハことハリぞと、朱雀院の給ハする也。「かんのきみの御事」とは、おぼろ月よのげんじにうき名たて給しもことハリと朱雀院おほしめしいでたる也。

一、「この御うしろミどもの」とハ、女三のミヤの御めのとのせうと、左中弁なる、「かの院の」とハ、六条院の家司かけたるが、此女三のミヤにもへつ心よせことにてまいりたるに、「しかく御けしきありて」とハ、源氏の御けしきうかゝひて、女三の宮の御こときこえても、内親王ハひとりおハしますこそれいの事なれど、何事につけてもうしろミし給ふ人のあるこそたのもしけれ。朱雀院をききたまつりて、又ま心に思きこえ給ふべき人もなければ、われハつかうまつるとも、なればかりのミやづかへにかあらん。をのづから思ひのほかのこともおハしまし、かるしきこともあらん時は、いかさまにかハわづらハしからんなどかたる也。

一、「おハしますよに」とは、朱雀院のおハしますよに、ともかくもさだまりたらば、つかうまつりよくあるべき。

一、「かしこきすぢ」とは、みかどのすぢといふとも、女ハいとすくせさだめがたき物なれば、よろづなげかしきとめといふ也。

一、「あまたの御中にとりわき」とハ、ひめミやあまたおハします中に、朱雀院のやんごとなくおほさるゝひめミやなれば、人のそねミもおハしませんが、いかでちりほどのなんもつけたてまつらじと、めのと左中弁にかたらふ也。

一、「左中弁も、いかならん。「院ハあやしきまで」とハ、源氏ハ心ながく、かりにても見そめたてまつり給し人を、心とまりたるも、ふかゝらざりしをも、あまたつどへ給へども、やんごとなきハむらさきのうへばかりこそおハしませば、それにせかれて、かひなきすまひし給ふかたぐいおほかるを、御すくせありて、女三のミやおハしますやうもあらば、いミじきむらさきのうへときこゆとも、たちならび給ハじとハおもへども、なをいかゞあらんと、はゞからるゝ事ありと左中弁いへる也。

一、「このよのさかへ、身に心もとなきことなきを、女のすぢにて、わが心にもくらゐにもあひたる人なきと、つねのくちすさびにもへゞげんじの給へば、女三のミやおハしさんことは、にあひ給はんとおほゆると左中弁いへる也。「をのが見奉る」とハ、わがミたてまつるにも、かたぐいにつけて源氏のおもひ人たち、そのくらゐなき人ハおハしませねど、みなたゞ人にて、源氏の御くらゐにならずへべき人ハなければ、おなじくハ、女三のミやおハしま、たぐひたる御あハひならんとおもふとかたる也。

一、「このつゝめでに」とハ、めのと、左中弁がしかく申たると、朱雀院に申たてまつる。源氏ハかならずうけひき申させ給はん。ほいかなひておほしめすべきを、御ゆるしあらば、つたへ申さんと左中弁申たりしとめのと申す也。

一、「ほどくにつけて」とは、源氏ハ人のきハく、ほどくおほしわかまへて、ありがたき御心なれど、たゞ人だに、あまたねたみごとある中にまじへるはあかぬことにするわざなれば、いかゞ侍らん、御うしろのミのぞミ給ふ人ハ、あまた侍る也。おほしきだめてこそよく侍らめときこゆ。

一、「いまのよのやうとてハ、ほがらかに」とハ、心のそこにとをりてよの中をすぐし給ふ人おハしますを、女三のミやハあさましくおほ

つかなくおハしませば、さぶらふ人ハ、つかうまつるかぎりあるを、大かたの御心をきてにしたがひてこそ、さるまじきしも人などもなびきつかうまつれ。とりたてたるうしろミなくてハ心ほそからんなど、めの朱雀院に申す也。

一、「しか思ひたどる」とハ、さやうにおもふゆへ、みこたちのおともち給ふハ、うたてあハくしきやうなれど、「又たかきハ」とは、みかどのひめミやおとこにミゆるにつけて、くやしきおもふことも、うちまじる物なれば、かつハ心ぐるしく思ひみだるゝと、朱雀院の給ふ也。(97)

一、「又さるべき人にたちをくれ」とハ、おやにをくれてのち、心をたてゝひとりよをすぐすことも、むかしハ人の心たいらかにして、よにゆるさるまじきことをば、思をよバズ、内親王などに心かくる事なくならひたるを、いまのよにすきくしくみだりがハしく、きふまでたかき家にありしむすめの、けふはなをくしくくだれるすき物どもあざむかれて、なきおやのおもてふせ、はづかしむるたぐひおほかる、いひもてゆけば、たかきもくだれるもおなじことなるすくせといふ物、しりがたき事なれば、うしろめたく、すべてあしくもよくも、おやの心にゆるしをきたるまゝにてよの中をすぐすハ、すくせくにて、のちのよにおとろへある時も、ミづからのあやまちにハならず、又ありてこよなきさいはひある時は、かくてもあしからざりけりとミゆれど、なをたちまちにうちへまきつけたるに、おやにしられぬおとこに、心づからしのびわざしたるは、をんなの身に、ます事なききずとおほゆる。なをくしきたゞ人の中らひにだにあハつけき事なり。ミづからの心よりはなれてあるべきにもあらぬを、おもひのほかに人に見え、すくせのほどをさだめられんハ、身のもてなしをしはからるゝを、女三のミやハ物はかなくおハするを、これかれ心にまかせて、もてなしきこゆれ。さやうなる

事のよにきこえは、うき事ならんと見すて給はんのちを、うしろめたくおぼしめしたる也。「いよくわづらハしく」とハ、めつとのなど、朱雀院の女三のミヤの御事こまやかにの給へば、心くるしがりあへる也。

一、「いましバし物をもおほししるまで」とハ、女三の宮おとなび給はんまで、見すぐさんとおもへども、出家しゆけのほいとげずハいひくちをしからんとおぼしめしたつ也。

一、「六条ろくじょうのおとゞハ」とは、源氏ハ、さりとも物の心えて、うしろミ給はん女三の宮をあづけをかん、あまたの北方きたのあたをねたむべき事にあらずと、朱雀院おほしさだむる也。

一、「うしろやすきかた」とは、源氏ハ物のこゝろふかくおハすれば、うしろやすきかたハ、よのためしともすべき人と、朱雀院おぼさるゝ也。

一、「兵部卿のミヤ、人がらハ」とは、ほたるの兵部卿ハ、人がらハめやすくおハす。こと人とおもひわくまじきはらからなど、あまりなよびよしめき、おもきかたをくれたれば、たのもしげなくおぼさるゝ也。

一、「大納言朝臣だいなごんあそ」家づかさのぞむ」とハ、女三めいのいへづかさになし給へと、この大納言のぞミ給ふ也。此人、たれともなし。物まめやかにハあるべけれど、さやうにをしなべたるきハにハ、女三のミヤゆるしがたきとおぼす也。（一〇）

一、「むかしも、かやうなるえらびにハ」とは、忠仁公ちうじんこう、仁明天皇にんみんてんわうのむこにとり給へるも、人にことなる才覚さいかくをゑらび給たると也。

一、「ゑもんのかミの」とハ、かしハ木の、女三のミヤあづかりたてまつらんとわび給ふと、おぼろ月よにつきて申給へど、くらゐいますこし物めかしきほどになりなばとおぼす。としもわか、かるゝしきほどなる也。

一、「たかき心ざしふかくて」とハ、内親王ならでハとゑもんのかミおもひて、やもめずミにて、おもひあがれるけしきハ、人にぬけたる心と也。さえなどもことなく、つゐにハよのかためとなるべき人と也。「よのかため」とハ、撰せん関かんになるべきといへる心也。「このためにと思ひはてんハ」とハ、此女三のミヤのためにハ、かぎりあるたゞ人にてくちおしからんと也。

一、「あねミヤたち」とは、女三のミヤのあね宮たちおハしますに、心かくる人もなきと也。（一一）

一、「うちくゝにの給ハするさゝめき事」とハ、女三のミヤの御あつかひ、をのづからきく人、心をつくすおほきと也。

一、「おほきおとゞも」とハ、内府も、ゑもんのかミの、みかどのみ子たちならでハ見じとおほすに、女三のミヤえたてまつり給ハゞ、わがためめんぼくならんとおほえて、おぼろ月よの内侍のかミに、かのおねきたのかたしてつたへさせ給ふ也。内府の北方ハ、おぼろ月（十二）のあね、四のきミ也。かぎりなきことのはをつくして、そうせさせ給へる也。

一、「兵部卿宮ハ、左大の北方」とハ、玉かづらをいひはづし給て、玉かづらのきゝ給はん所もありと、人をえりておほすに、女三のミヤの御事をきゝ給ひて、心をつくしおほしいられたる也。

一、藤大納言ハ、としごろ朱雀院の別當べつたうなるが、院いんのミ山みやまごもりし給ひなんのち、心ぼそからんに、女三の宮のうしろミなさせ給へとそうし給ふ也。（一三）

一、「権中納言も」とハ、夕ぎりも、人づてならず、朱雀院の女三宮の御事の給ハせし御けしき見たてまつりしかバ、そうしよりなバ、もてはなれてハあらじとおほせど、くもゐのかりの、いまハとうちとけたのミ給へるを、としころのつらさにもことづけつべかりしほどに、ほかさまにわくる心もなかりしを、いまさらになにわかに物を

やおもハせんと思ひかへし給ふ也。

一、「やんごとなきかたに」とハ、女三のミヤにかゝづらハ、なに事もおもふまゝならで、ひだりミぎに心やすからずハ、わが身もくるしくこそあらめ、ともとよりすきくしからぬ心なれば、思ひしづむれど、さすがにほかざまにさだまり給はんハ、いかにぞや、みハとまりける也。

一、「春宮も、かゝる事」とハ、女三の宮さだめかね給へる事きこしめして、のちのよのためしともなるべきを、よくおほしきだめよとの給ふ也。⁽¹²⁷⁾

一、人がらよろしとても、たゞ人はかぎりあるを、まことにおぼしめしたつことならば、源氏にこそおやさまにゆづり給ハめと、御せうこありけるを、朱雀院きかせ給て、さる事なり、いとよくおほしよけると、いよく御心にもよほされ給て、まづかの弁してぞ、源氏につたへさせ給ける。

一、「此ミヤの御こと、かく」とハ、女三のミヤを、おぼしわづらハせ給へるさま、きゝをき給へれば、心ぐるしき事にもあるかな、朱雀院の御よのこりすくなしとて、われハいくばくたちをくるべきとてか、御うしろミをうけとりきこえん。しだいをあやまたず、いましバしのこりとまるとも、ほどはあるまじきなど、思ひみだれ給へる也。

一、大かたにつけてハ、いづれも朱雀院のひめミヤたち、よそにハおもひはなちたてまつらじを、又女三の宮をとりわきてうけとりたてまつり⁽¹³⁾たらんハ、ことにこそうしろミきこえめ。「不定なる」とハ、朱雀院よりさきにわれやなくならん、さだめなきと源氏の給ふ也。

一、「うちつゞき」とハ、朱雀院にわれもうちつゞきをそむきなば、中く、女三のミヤのためにも、わがためにも、あさからぬさま

たげならんと、源氏の給ふ也。「ほだし」ハ、さまたげ也。

一、「中納言などハ」とは、夕ぎりハ、としわかかろくしきやうなれど、人がらゆくさきとをくて、つるにおほやけの御うしろミともなり給ふべき人なれば、朱雀院のむこにとり給はんにも、などかハあしからんなど源氏の給ふ也。

一、「おもふ人さだまりにて」とハ、夕ぎりハ、くもゐのかりにちぎりさだめ給ひたれば、それに朱雀院は、さかり給ふらんと給て、源氏ハ女三の御ことおほしはなれたる也。⁽¹³²⁾

一、「弁ハ、おぼろけのさだめならぬ」とハ、せうくの御あつかひならで、朱雀院、女三のミヤを源氏にあづけ給ハんと給ひいでぬを、かやうにおほせきり給へば、左中弁くちおしくおもふ也。

一、「さすがにうち多みて」とハ、源氏、あながちに朱雀院かなしうし給ふひめミヤにて、かやうにあつかひ給ふにこそあらめ。たゞみかどにたてまつり給てよからんと給ふ也。

一、「やんごとなきまづの人々おハす」とは、中宮こうきでんなど、うちにおおハしますといふ事ハ、よしなきこと也。それに女三のミヤの御おほえをしけたれ給ふ事ハあるまじきと也。

一、「古院の御とき」とは、きりつぼの天皇の御とき、こうきでんのあしきさきのはじめよりまいり給たるといきまき給しかど、すゑに入内ありし藤つぼにハをされ給しと、げんじの給ふ也。「いきまき」⁽¹⁴⁾

一、「このみこの御は、女御」とハ、女三のミヤの御は、藤つぼの御いもうとにておハせしと也。かたちも、藤つぼのさしづきにハ、よくおハしましたると也。

一、「いづかたにつけても」とハ、朱雀院の御かた、は、かたにつけても、女三のミヤをしなべてのかたちハよもあらじと、源氏ゆかしくハおほす也。「いぶかしく」と、ゆかしく也。としもくれぬる也。

一、「院に、御心ちをこたる」と、朱雀院ハ、御心ちよろしくもおハしまさねば、いそぎて女三のミヤの御もぎのことおぼしめしたつさま、ありがたきまでぎしきいつくしくとのへ給ふ也。

一、「かゑどの」とハ、朱雀院のうちにあり。栢梁殿と書て、かゑど
のとよむ也。

一、「もろこしのきさきのかざり」、禕衣、袷翟、闕翟、鞠衣、展衣、
祿衣、もろこしのきさきの六服と、これをいふ也。女三のミヤの
かざり也。栢梁殿ハ、漢武帝のをうつされたるといへり。ハ15

一、「御こしゆひにハ」とハ、女三のミヤのもぎのこしゆひに、内府を
朱雀院めし給ふ也。院の御事をむかしよりそむき申給ハねば、ま
り給ふ也。いまふたり大臣と、左右の大臣、たれともなし。そのの
こりのかんだちめ、のこるなくまいり給へる也。「ためらう」とハ、
心ちなどのなやましきをたすくる也。扶行とかく也。

一、「みこたち」とハ、親王たち也。たれともなし。てん上人ハ、きん
ちうの春宮のてん上のこらずまいれる也。

一、「院のみかどの御こと」とハ、朱雀院の御いそぎの事、このたびば
かりこそと、春宮をはじめたてまつり、みかども藏人所のおさめど
のゝから物ども、おほくたてまつらせ給也。「藏人所」とハ、禁中の
御蔵の惣つかさしり給ふ所也。「こちたし」とハ、ことごとくし也。

一、「そんざの大臣」とハ、こしゆひの内府のひきいで物也。七とくを
ハ15 そなへたる人をもいふ也。譜第・器量・才幹・有職・近習・容
儀・富有、これ七とく也。又、徳・爵・齡の三尊者ともいへり。

一、「かの院より」とハ、源氏より内府のひきいで物ハ、朱雀院へま
いらせられたる也。

一、「かのむかしの御くしあげのぐ」とハ、齋宮にたち給ふ時のさしぐ
しのはこをあらため、さすがにもとの心ばへミせて、まいらせ給へ
る也。御もぎにハ、まづかミあれば、くしのはこ奉り給ふ也。

一、「ミヤのごむのすけ」、中宮のごんのすけ、朱雀院のてん上もかけ
たる也。「ひめミヤ」とハ、女三のミヤにまいらせよとの給へど、哥
ハ院へ也。

一、「さしながらむかしをいまにつたふれば玉のをぐしぞ神さびにけ
る」、さながらとさしながら、ふたつをかけて也。わがごとく女三の
ミヤきさきに給への心也。「かミさびにける」とハ、上代よりいま
につたハリたる心也。ハ15 引哥、そなハれし玉のをぐしをさしなが
らあハれかなしきあきにあひけん。ことばばかりをひく也。又、さ
しながら人のこゝろをみくまのゝうらのはまゆふいくへなるらん。

これは、さながら也。さしながらとさながらと、ふたつをかけたる
に、此二首ひく也。

一、「よろしきほどの人のうへにて」とハ、いまハかミおろしても、よ
きとしばへぞなどゝいふ人のうへにてさへ、さまかハるはかなしき
わざなるを、ましていまださかりのこゝちするみかどの御ぐしおろ
し給ひたるハかなしとおもハぬ人なきと也。

一、「御かたぐもおほしまどふ」ハ、女御・みやすん所たちかなしび
おほしまどふ也。ハ16

一、「院御らんじつて」、此哥朱雀院御らんじて、むかしのことあハ
れにおほしいでたる也。「あへ物」とハ、齋宮にたち給ひ、又、きさ
きにたち給ひたるに、女三のミヤあやかり給へば、くしのはこゆづ
り給たるを、けしうハあらずとおほさるゝ也。「けしうハあらぬ」
ハ、うたがひもなくめでたきさしぐしといへる心也。「おもだゝしき」
ハ、めんぼくほどこし給しかんざしと也。「かんざし」とハ、かミの
かざりをいふ也。

一、「むかしの哀をさしをきて」とハ、いせにくだり給し時の事ハをき
て也。「さしづきにみる物にもがよろづよをつげのをぐしも神さぶる
まで」、中宮のさしづきにきさきにたてゝ、女三のミヤ見るよしもが

など也。「神さぶるまで」ハ、よにひさしくおハしますほどいへる心也。

一、「この御いそぎ」とハ、女三のミヤのもぎはてぬれば、三日過して、つるに朱雀院みぐしおろし給し也。「かたぐもおほしまどふ」とハ、¹⁶朱雀院の女御・かうみたちかなしびなげきまどひ給ふ也。

一、「内侍のかんのきミ」とハ、おぼる月ハ朱雀院の御そばにおハしにして、とりわきてかなしがり給ふを、院もこしらへかね給ふ也。「こしらへ」とハ、なぐさめかね給へる也。

一、「子をおもふミち」とハ、女三のミヤをおほしめすよりも、おぼる月よをおほしめしなげくハ、たへがたくおぼすと也。

一、「御いむ事の」とハ、五戒さづかり給ふ事也。「ほうぶく」とハ、出家のさうぞく也。

一、「しづかなる所に」とハ、にし山の御てらに、こもらんとおぼす也。

一、「たゞこのおさなきミヤ」とハ、女三のミヤにひかれて心みだれ給ふと朱雀院の給ふ也。

一、「うちより」とハ、禁中よりはじめ御とぶらひしげき、ことさらなる也。^{17オ}

一、「六条院も」とハ、源も、朱雀院の御心ちよろしきよしき給て、まいり給ふ也。「御たうばりの御ふ」とハ、給ハリ給へる食封などハ、おりみみかどおなじやうなれど、まことの大上天皇のやうにハうけばりもてなし給ハで、ことそぎ給て、ことぐしからぬ車にてまいり給ふ也。こがねかざりのひらうけ也。ひらうけとハ、いとをくミ、さげかざりたる車也。

一、「かむだちめも」とハ、御ともの公卿も、くるまにのり給へる也。朱雀院ハ、げんじまちうけ給て、よろこび給ひ、御心ちおぼしつよ

りて、たいめんし給ふ也。「うるハしきさまならず」とハ、まことの上皇のぎしきならず、つねに朱雀院のおハしますかたに、おましよそひくハへて、げんじいれたてまつり給へる也。

一、「きしかたゆくさき」とハ、げんじ御心ちもくれて、かなしさに、なミだもためらひ給はず、なき給ふ也。^{17ウ}

一、「古院にをくれ奉りしころより」とハ、ちみかどにをくれ給し時より、げんじ出家せんとおもふ心すみしかど、心よハくおもひたよひて、つるに朱雀院にをくれたてまつりぬる心のぬるさとの給ふ也。おもひたよひてとハ、思ひまどひて也。

一、身にとりては、さハる事あるまじく思ひたつこと待つれども、しのびがたき事おほかりけるを、よくおほしめしすてこと、源氏なぐさめがたくおほしなげく也。「しのびがたき」ハ、かんにんしがたき也。

一、朱雀院も物心ほそくしほたれ給つ、いにしいまの事どもきこえ給ふ也。

一、「けふかあすか」、引哥、今日不知死、明日不知死、何故造作無常、身安穩、かんくちうといへるとり、かくのごとくなり。

一、「ふかきほいのはし」とハ、出家をだにせでやすぎぬべきとおもひおこして、かくなりたると朱雀院の給ふ也。^{18オ}

一、「このりのよハひなくハ」とハ、みぐしおろしても、いのちなくハ、をこなひもつとめがたけれど、まづかりそめにも心をのどめて、ねんぶつをだにとおもふと、朱雀院の給ふ也。

一、「はかぐしからぬ身ながら」とハ、かいぐしからぬ身にて、いままでながらへたるハ、たゞ出家せんとおもひし心ざしゆへのちのびたると朱雀院の給ふ也。

一、「いまでつとなき」とハ、いまで出家延引したるをこたりにくちおしきとの給ふ也。をこたりに、過怠也。とがをやすからず思ふ

と朱雀院の給ふ。つゝめでに女三宮の御ことをの給ふ也。みこたちあまたうちすつる中に、「おもひゆるる人なきを」とハ、女三のミヤをうしろめたく見わづらひ侍ると、まをにあらざ、朱雀院の給ふ也。

「まをにハ」とハ、まつすぐにあらざるの給ふ也。¹⁸⁷

一、「みけしきを」とハ、朱雀院のみけしきを、源氏心ぐるしく見給ひて、心のうちにも、女三の宮をさすがにゆかしくおぼす也。

一、「たゞうどよりも、かゝるすぢ」とハ、内親王ハ、たゞ人よりも、わたくしの御うしろなき、くちおしくおぼすこともあらんと、げんじの給ふ也。「わたくしのうしろミ」とハ、おとこもち給ハでハ、内親王ハ、人にあなづられ給ふ事もあらんと也。

一、「春宮おハしませば」とハ、女三宮、春宮にきこえつけをき給ハゞ、をろかあるじきと源氏の給ふ也。あきらけきとハ、春宮、明君にてましますべければと也。

一、「ましてこの事」とハ、女三のミヤの御ことを、春宮にの給ハせをかバ、朱雀院の御ことばをかるめ申給ふべきにあらざと源氏の給ふ也。

一、「おほやけとなりて」とハ、みかどになり給へば、こまかに人をめぐミ給ふ事なりがたかるべければ、女三のミヤの御ため、なればかりかはげざやかなる御心よせあるべきと、源氏の給ふ也。「げざやかなる」ハ、いちじるき心也。

一、「をんなの御ためにハ」とハ、さるべきすぢにちぎりかハすほどならでハ、まことにたのもしきことハなければ、女三のミヤの御ためには、よろしからん人をおほしきだめてあづけ給へと、源氏申給ふ也。

一、「しみてのちのよの」とハ、朱雀院よをそむかせ給てのあとの事をうたがひおほしめさば、女三の宮によろしからん人えらびて、あづけ給へと、源氏の給ふ也。

一、「それもかたき事になん」とハ、女三のミヤにおとこさだめ給はん事なりがたきこと、朱雀院の給ふ也。

一、「よをたもつきかりのみこと」とハ、さがのてんわうのひめミヤ、忠仁公にあハせ給たる事也。ましてかくいまハとよをそむきハにて、女三のミヤのミヤのことを、ことごとくしくおもふべきにハあらねども、すつる中にもすてがたくおもふに、やまひハおもくなりゆく。

とりかへすべきにあらぬ月日のすぎゆけば、心あハたしくなんと、朱雀院の給て、かたハラいたきゆづりなれど、女三の宮を、とりわきてはぐゝみて、御心とおほしきだめて、さるべき人にあづけ給へと、源氏にゆづり給へる也。

一、「権中納言の」と、夕ぎりの、ひとりおハしましたるほどに、すゝみよるべき物をなど、朱雀院の給ふ也。「おほきまうちぎに」とハ、内府にせんせられてとの給ふ也。大政大臣を、おほきおほいまうちぎミといへる也。

一、「中納言のあそん」とハ、夕ぎり、女三のミヤにまめやかにハミヤづかへし給ふべければ、何事もまだあさくこそ侍らめ。かたじけなくとも、ふかき心にうしろミきこえさせん事ハ、朱雀院の御かけにかハラずはぐゝみたてまつらんとうけひき給たる也。「たゞゆくさきミジ²⁰かくて」とハ、よハひのすゑになりつれ。つかうまつりとゞけましきことこそいかゞあらんと、源氏の給ふ也。

一、「あるじの院がた」とハ、朱雀院がたの人々も、「みな御前にてミあるじの事」とハ、御出家のゝちなれば、鉢などにて、しやうじんものをもちいらるゝ也。「せんかうのかけばん」、ぢんかうのあさきを、せんかうといへる也。みはちにて、おもものまいる也。御膳を、おもものよむ也。

一、「別當大納言」とハ、女三のミヤの家つかさのぞミシ大納言也。

一、「あるじの院」とハ、朱雀院ハ、「けふの雪に、御風くハゝりて」

とハ、ひきかぜになやミ給へども、女三のミヤの御事源氏のうけひき給しに、心やすくおぼすと也。

一、「六条院ハ」とは、源氏ハ、女三の宮うけひき給て、なまじいに心ぐるしくさまぐおぼす也。(20ウ)

一、「むらさきのうへも、かゝる御さだめ」とは、女三のミヤの事をほのき、給しかど、源氏よもうけひき給ハじとおぼしたる也。

一、「さきの齋院」とハ、あさがほのさいるんをも、ねんごろにの給ふやうなりしかど、まことにもおぼしとゞめざりしとおぼして、女三のミヤの御事、とかく源氏にもとひ申給ハぬ也。

一、「此ことをいかゞおぼさん」とハ、女三の宮のことをき、給ハゞ、むらさきのうへいかゞおぼさん、われハ露ほどもかハる心あるまじきをと、源氏おぼす也。

一、「さることあらんにつけて」とハ、女三のミヤのおハしまさんにつけてハ、むらさきうへに心ざしふかさこそまさらめ、見さだめ給ハぬほどや、おぼしうたがハんと、源氏おぼす也。

一、「ゐんのものしげなくなり給し」とは、朱雀院の御なやミを、とぶらひにまいりて、女三宮をすてがたくおぼしめして、しかくの給ハ（21オ）の給ハせつけしかバ、きこえいなびてうけひきたりしと、源氏の給ふ也。「いなびず」とは、いやと申さずといへる心也。

一、「すくくしくもかへさひ申さで」とハ、かへすくもいやと申さで、女三のミヤの御事うけひき申たりし朱雀院の御山ずミにうつり給はんほどにこそ、女三のミヤわたしたてまつるべけれ。あぢきなくやおぼさるべき。いミじきことありとも、御ためかハる事あるまじきと、むらさきのうへに源氏の給ふ也。

一、「かの御ためにこそ」とハ、女三のミヤの御ためにこそ心ぐるしきこともあらめ。それもかたわならずもてなさんとの給ふ也。

一、「たれもく」とハ、女三のミヤも、むらさきのうへも、物ねたミ

し給ハで、のどやかにておハしまさば、あしかるまじきと也。

一、「はかなきすさびごとをだに、ねたミ給ふ心に、女三のミヤのこと（21ウ）をいかにむらさきのうへおぼすらんと、源氏をしはかり給ふ也。

一、「つれなくて、あハれなる御ゆづりにこそ」とハ、むらさきのうへ、うらみありがほにもてなし給ハで、女三のミヤの御ことを、あはれなる御ゆづりなり、われハいかなる心をきたてまつるべき、女三のミヤめざましとおぼさずハ、かくてもゐるべきとの給ふ也。

一、「かの御は、女御」とハ、女三のミヤの御は、ハ、むらさきのうへのち、兵部卿のミヤの御いもうとなれば、したしくこそおぼすべれと、むらさきうへの給ふ也。

一、「うちとけ給ふ御ゆるしも」とハ、むらさきのうへの心よく女三のミヤの御ことをねたミ心なくゆるし給ふも、心もとなきと源氏の給ふ也。

一、「まことに、さだにおぼしゆるし」とハ、真実、むらさきのうへ女三のミヤと御なかよくてすぐし給ハゞ、いよくあハれならんと、源氏の給へる也。(22オ)

一、「ひがごとなどせん人のことき、いれ給ふ」とハ、人のことばき、いれ給ふな也。「よの人のくちといふ物」、引哥、人ながら人ぞさくなるゆめよきミ人の中ときき、たつなゆめ。人ぞさくとハ、人のなかいひさくる也。さくるハ、いひはなつ也。「ほ、ゆがむ」とハ、正直にもなく、ゆがむことのミおほからんを、むらさきのうへき、いれ給ふなどの給ふ也。

一、「まだきにさハきて」とハ、まだしことに心さハがし給ふ女三のミやおハしましなば、なをこそむらさきのうへに心ざしまさるべけれと、源氏よくをしへ給へる也。

一、「心のうちにも」とハ、むらさきのうへ、心のうちにも、女三のミ

やの御ことは、そらよりいできたるやうなることなれば、源氏ものがれ給ふかたなくてこそうけひき給つらめ、にくげにいひなさじ、わが心に源氏はゞかり給ひ、いさむるにしたがひ給ふまじきこと、むら22ウさききのうへおほしきさだむる也。

一、「式部卿のミヤのおほきたのかた」とハ、まゝはゞのきたのかたの、つねにうけハしげにの給て、ひげくろの大將だいしやうのことにてだに、そねミ給ふを、女三のミヤのこときゝて、いかにいちじるくおもひあハせ給はんと、むらさききのうへおほす。「うけハし」とハ、のろふやうにの給ふ也。「おいらかなる」とは、まめやかなる心にもおほす也。「かばかりのくま」とハ、心のおくにこめて、むらさききのうへおほすと也。

一、「わが身を思ひあがり」とは、むらさききのうへ、われにならぶ人なしとおほしつるに、女三のミヤわたりなば、をしけたれて人わらへならんとおほす也。

一、「ひめミヤ」とハ、六条の院にわたし給はんといそぎ給ふを、女三のミヤに心かけ給し人々、くちをしがりなげくもおほきと也。

一、「うちにも」とハ、冷泉院も、女三のミヤに御心かけ給てきこえ給けるに、23オ六条院にわたり給ふときこしめして、おほしとまり給し也。

一、「ことしぞよそぢに」とハ、源氏四十よそぢになり給へば、御賀の事を、「おほやけにも」とハ、冷泉院も、きこしめしすぢがたく、よのなかひゞきて、いとなミ給ふ也。

一、「む月廿三日、子日なるに」とハ、正月ハ子日ごとにわかなをもちい給へる也。「左大將どのゝきたのかた」とハ、玉かづら、源氏の御賀がをとりをこなひ給ふ也。にわかなるやうにおハしましければ、いさめかへし給ハぬと也。「いさめかへし」とハ、賀がをとりをこなひ給ふ事を、源氏無用むちゆうともの給ひかへさぬと也。

一、「ひゞきことなり」とハ、ひげくろのとゞのへ給ふ事なれば、ぎしきことゞくしきと也。「みなミのおとゞのしのはなちいで」とハ、むらさききのうへのおハしますまちのしんでん也。「はなちいで」とハ、客きやく 23ウ人あへしらる所也。「かべしろ」とは、かべにそへて、まんまく也。

一、「ゐし」とハ、御座也。源氏おりのみかどの御くらるなれば、大床だいしやうなどかざらるべきを、なにことも卑下ひげし給へば、平座也。「いし」とハ、椅子也。「御ぢしき」とは、からむしろに、大紋だいまんのかうらいべりさしたる也。「四十まひ」、これをしかる、四十のがによそへて也。一、「らでんのミづし」とハ、かいすりたる也。螺鈿らいでんと書也。をき物のたな也。「かうご」ハ、たき物のつぼ也。「ゆするづき」とハ、びんたらひ也。「かゞげのはこ」、かみけづり給ふぐ也。

一、「かざしのだい」、かんざしをき給ふだい也。金銀きんぎんの山水花樹さんすいけわじゆなど也。これハ、つくりばな也。ぢんかう、したんの木きにて、だいをつくりたる也。

一、「かねをも、つかひなしたる」とハ、こがね・しろがねをもて、いろくの花・とりなどつくりたる、いろも心ばへすぐれたると也。

24オ
一、「かんのきミ」とハ、玉かづら、ミやびふかくし給へると也。「ミやび」ハ、なさけ也。

一、「人々まいり給へる」とハ、公卿きんぎゆう・てん上人まいり給へる也。

一、「かんのきミに」とハ、玉かづらに、源氏たいめんし給ふ也。むかしたハぶれ給ひしこと、さまゞにおほしいで給ふ也。「いとわか」とハ、源氏わかおハしませば、四十のがといふ事ハ、わがかぞへのやうなる也。としをへてたいめんし給へば、玉かづら源氏をはづかしとさへおほす也。

一、「おさなき君も」とハ、玉かづらのわか君也。

一、「かんのきミハ、うちつゞき」とハ、わかぎミ源氏に御らんぜさせじとの給へど、ひげくろ、かゝるつゝみで御らんぜせんとの給て、ふたりおなじやうなるふりわけがミの、なをしすがたにておハする也。おさなき人のきるをも、なをしといふ也。くびかミいれて、小袖のやうにしたつる也。

一、「ミづからの心にハ」とハ、源氏、わが心にハとしよりたるきハもおもひしられぬ、^{24オ}との給ふ也。「すゑぐのもよほしに」とハ、かやうに賀のいのりもよほしたまへるに、はしたなき心ちすると、げんじの給ふ也。

一、「中納言の」とハ、夕ぎりの、わか君まうけ給たれど、まだみせぬと、げんじの給ふ也。「人よりことに」とハ、玉かづら、人よりさきに賀をかぞへとり給て、かくもよほし給ふ。しバしおいをわすれてあるべきを、源氏の給ふ也。「かんのきミも」とハ、玉かづらも、ねびまさり給たる也。

一、「わかばさすのべのこ松をひきつれてもとのいはねをいのるけふかな」玉かづら、わかぎミひきつれてと、ねのびのまつを、おりいれて、よミ給へる也。源氏をもとのおやと、かうくをつくすの心也。「せめておとなび給ふ」とは、玉かづらも、としよりめきて、よミ給へる也。

一、「ちんのおしき」とハ、ちんかうにてつくりたる也。「わかな、さまばかり」とは、わかなのけしきばかり、さかなにまいらたる也。

一、「よつ」ハ、四十のがにかたとりて也。^{25オ}
 一、「こ松ばらす糸のよハひにひかれてやのべのわかなもとしをつむべき」わかぎミたちのよハひにひかれて、わかやぎてとしをつむべきと、源氏よミ給へる也。「かんだちめあまた」とハ、くぎやう座につき給へば、出給へる也。

一、「式部卿の宮ハ」とは、ひげくろのひどりのはひをさりて、玉かづ

らをいれ給たれば、まいらにく、おほしけれど、源氏の御せうそこれあれバ、したしきなかに、心をきたるやうならんとて、おハしましたる也。

一、「大将の、したりがほにて」とハ、ひげくろの、源氏のむこになりて、心ちよげなるハ、心ぐるしく式部卿のミやおほしけれど、御むまごのきんだちを御らんずれば、うれしくおほす也。「いづかたにつけても」とハ、ひげくろのわかぎミ、ひどりのはひのはらハ、むらさきのうへの御をいなれ、むつまじくおほすらんと也。「さうやく」とハ、雑の役也。

一、「こ物よそえだ」とハ、籠物ハ、桜・梅・柳などにつくるといへり。^{25ウ}

一、「おりびつ物よそぢ」四十の賀をかたとりて、かずかくのごとし。おりにもりひつに入たる也。玉かづらよりの献物也。「中納言をはじめ」とハ、夕ぎりはじめて、さるべききんとりつゞきて、源氏のおまへにもて出給へる也。「おまへに、ちんのかげばん」源氏のおまへに也。「御づき」とハ、あつ物もりたるうつハ物也。あつ物ハ、しる也。

一、「朱雀院のミくすりのこと」ハ、御なやミの事あれば、楽人・まひ人などはとのへ給はず。くわんげんばかりなると也。

一、「おほきおとゞ」とハ、ふえ・ことなどハ、内府とのへ給たる也。「かのおとゞ」とハ、内府の第一にひざうし給へるわごんのねも、ならびなきをとりいで給たる也。

一、「こと人ハかきたて」とハ、此わごん、よの人ハひきにくかるを、「衛門のかミ」とハ、かしハ木、いなむるをせめて、ひかせ給ふ也。「いなむ」ハ、いやがり給ふを也。^{26オ}

一、「おさくおとるまじく」とハ、内府におとるまじく、かしハ木ひき給ふ也。「さしもえつがぬ」とハ、おやの上ずなれど、こハつがぬ

物なるを、かしハぎおやのわごんを上ずひきつたへ給たると、源氏ほめ給ふ也。

一、「もろこしのつたへども」とハ、きんのこと、しやうのことなどは、てきだまりて、ならひやすき也。わごんハ、りよ・りち、てもさだまらで、ならひにくき物なるを、かしハ木、上ずめきたると也。きんのことなどは、みなもろこしわたりたる物也。

一、「すがゞき」とは、わごんのもて也。「よろづの物のねとゝのへられたる」とハ、わごんにて、びわ・しやうのこと・きんのことのねも、とゝのへて、ひきあハするといへる心也。

一、「おとゞハ」とは、内府ハ、てうしひきく、ゆるらかにしらべて、ひき給ふ也。これハ、老者のならひなると也。「これハわららかに」とは、かしハ木ハ、（あま）やハらかにひき給ふ也。「のぼるね」とハ、てうしたかく、しらべ給へる也。

一、「いとかうしもハ」とハ、かくばかり上ず、かしハ木ひき給はん
とハ、おもハざりしと親王・公卿もきゝ給ふ也。

一、「きん」ハ、兵部卿のミヤ、ひき給ふ也。此きんことは、ぎやうでんの御物也。「宜楊殿」とハ、たゞの重寶をおさめをかるゝ所、蔵人所のおさめどの也。それより、内府申くだし給たる也。「古院のすゑつかた」とハ、きりのみかどのすゑに、一品の宮の給ハリ給ひし也。此一品のミヤとハ、あしきさきの御はらの女一宮也。そのつたへくゝを源氏もおほしめしむるに、むかし恋しく兵部卿もなき給ふ也。

一、「きんハ、おまへに」とハ、源氏のおまへに、兵部卿宮、きんハゆづり給へる也。物のあハれすぐし給ハで、源氏、めづらしきて、ひき給へる也。

一、「かへりごゑになる」とハ、呂より律にうつる也。「あをやぎ」、うたひ、さいばら、（あ）

一、あをやぎを、かたいたによりて、うぐひすの、ぬふてふかきは、をけや、むめの花がさや、をけや、

一、「わたくしごとのやうに」とハ、この御賀、玉かづらのわたくしの礼儀と也。

一、「ろくなどきやうしやくに」とハ、けだかく餘情ある事を、きやうしやくといへる也。「ろく」ハ、ひきいで物也。かんのきミ、あかつきかへり給ふに、源氏より、をくり物まいらせらるゝ也。

一、「かうかぞへしらせ給ふ」、引哥、かぞへしる人なかりせばいたづらに谷のまつとやとしをつままし。

一、「おひやまさる」とハ、玉かづら時々おハしまして、おひまさるか
と見くらべと給へと、源氏の給ふ也。おもふやうに玉かづらにたいめんせぬも、くちおしきとの給ふ也。あハれにもおかしくもむかしの事おほしむる也。

一、「かんのきも」とハ、玉かづらも、内府を、たゞおやといふちぎりばかりにて、（あま）源氏のこまかなりし御あつかひを、おほしむるに、かくひげくろにちぎりはて給ふにつけても、をろかならず源氏の御事おほすと也。

一、「朱雀院のひめミヤ」とハ、女三のミヤ、源氏へわたし給ふ也。
一、「この院にも」とハ、源氏も、御心まうけの心づかひ、よのつねならぬと也。

一、「はなちいで」とハ、しんでんのうちのひさしに、ミちやうたて、女三のミヤのおまし所にしつらひ給へる也。わたどのかけて、女房たちのつぼねく、こまかにしつらハれたる也。

一、「うちにまいり給ふ」とハ、入内ある人のやうに、朱雀院よりも御てうどなど六条院へはこびわたし給ふ也。「御をくりに」とハ、女三のミヤの御をくり、公卿あまたまいり給ふ也。「けいしのぞミし大納言」とハ、女三のミヤの御うしろのぞミし大納言も、御ともに

まゐり給へる也。

一、「御くるまよせたる所に院わたり給て」とハ、たゞ人のつまむかへたるやう（28）に、源氏、女三のミヤをおろしたてまつり給へる也。大上天皇のくらゐをひげし給ふて、臣下（しんか）のやうにもてなし給へる也。「れいにたがひたる」とハ、大上てんわうのぎしきにたがひて、源氏卑下し給へるといふ心也。

一、「うちまゐりににもにず」とハ、入内にも、女三のミヤの御わたりにぬと也。

一、「むこの大きミといはんにもことたがひたる」とハ、源氏大上てんわうと申さんにもたがひて、たゞ人の御ふるまひといへる心也。

一、「三日がほど」とハ、女三のミヤむかへとり給て、三ヶ日（が）のあひだの祝言（せうげん）を、朱雀院よりも、源氏よりも、いかめしきミヤびをつくし給へる也。「ミヤび」とハ、なきけあること、めづらしきまでしつくし給へると也。

一、「たいのうへも」とハ、むらさきのうへも、ことにふれて、たゞならずおぼす事につけても、人におとりけたるゝ事もあるまじけれど、このとし月ならぶ人なくならひ給て、女三のミヤの花やかにおひさ（29）きとをく、あなづりにくきけハひなれば、はしたなくおぼさるゝ也。

一、「御わたりのほども」とハ、女三のミヤのわたり給ふぎしきをも、源氏ともろ心にむらさきのうへおぼしあつかひけるを、ありがたき心とおもひきこえ給へる也。

一、「ひめミヤハ」とは、女三のミヤハ、まだちいさく、かたなりに、いといはけなく、ひたミちにわかび給たる也。

一、「むらさきのゆかり」とは、むらさきのうへのちいさくおハしましたるおりおほしいづるに、それハ、ざれておかしかりしを、女三のミヤハ、あまりいはけなくみえ給ふ也。むらさきのうへ、ねたミ心

もなければ、中／＼よきと也。

一、「三日がほどハ、よがれなく」とハ、三ヶ夜（が）ハ、よがれなく、女三のミヤのかたへ源氏わたり給へるを、むらさきのうへ、ひとりならひ給ハねば、物あハれ也。「御ぞども、たきしめ」とハ、源氏の御ぞ、たきしめ給ふて、むら（29）ささきのうへうちながめておハしますさま、らうたげなると也。

一、よろづの事ありとも、むらさきのうへに、人を又ならべてみるべき事かハ、たゞわがあだ／＼しき心がら也と、源氏思ひかへし給ふ也。

一、「わかけれど、中納言を」とハ、夕ぎり（を）を、朱雀院むこにとらんとハおほしかけぬ物をと、わがあだ／＼しき心を、源氏つらくおぼしめる也。

一、「こよひばかりハ、ことハリ」とハ、三ヶ夜（が）ハ、女三宮におハしまさでかなハぬ事なれば、ゆるし給へと、源氏むらさきのうへの給ふ也。

一、「かの院にきこしめさん事」とハ、女三のミヤに、又かれ／＼ならば、朱雀院のきこしめさん事、いかゞならんと、源氏思ひみだれ給ふ也。

一、「ミづからの心にだに」とハ、源氏わが心にだに、さだめかね給ふ事を、われハいかゞことハリもなにも、いづこにのこるべきぞと、むらさきのうへの給ふ也。

一、「はづかしうさへ」とは、むらさきのうへにことハリいハれ給ひて、げんじ（29）はづかしくおほして、よりふし給へば、むらさきうへ、すゞりひきよせ給て、

一、「めにちかくうつればかハるよの中をゆくすゑとをくたのミけるかな」と、「ふるごとなどかきませ給へるを」とハ、めにちかく女三のミヤに源氏思ひうつり給へる心をしらで、ゆくすゑまでかハラ

じとたのミたるわが心はかなしと、むらさきのうへよミ給へる也。
源氏ことハリぞとおぼして、御返し、「いのちこそたゆともたえめさ
だめなきよつねならぬ中のちぎりを」、いのちハさだめなき物なれ
ば、たえばたえよ、むらさきのうへとよのつねならずちぎりたる事
ハたえじと也。

一、「とミにもわたり給はず」とハ、にわかにも女三のミやへ源氏わた
り給ハぬを、かたハラいたしと紫のうへそゝのかし給ふ也。

一、「いまハとのミもてはなれ」とハ、好色心もてはなれて、源氏よ
そ心なくなり給たるとうちたのミてすぐすを、よのきゝみゝもなの
めならぬ^{30オ}ことのできぬるよと、女三のミやの御ことを、むら
さきのうへ、いまよりゆくすゑも心もとなくおぼさるゝ也。「なのめ
ならぬ」とハ、大かたならぬ也。

一、「いづかたもみなごなたにハ、はゞかりをき」とハ、むらさきのう
へにハ、はゞかりをき給へばこそ、めやすけれ。女三のミやのおハ
しましたるハ、大かたならず、心くるしき事と、人々もおもふ也。女
三のミやにをかけたれども、むらさきのうへ、おハしましたがたから
んと也。

一、「露もみしらぬやうに」とハ、人々いひなげくをも、むらさきのう
へ、みしらぬやうにて、おハします也。

一、「これかれあまた」とハ、花ちるさと・あかしのうへなどおハしま
せど、源氏の御くらゐにあひ、御心になかなひたるもなきやうにおほ
さるゝに、女三のミや、おハしましたるハ、めやすき事也。われも
わらハ心のうせぬに、むつびきこえてもあらんと、紫の上の給ふ也。

〈30ウ〉

一、「ひとしきほど、おとりぎま」とハ、われとひとつなミの人、又、
おとりぎまの人などにこそ、ねたましき事も、いひおもふべけれ。
女三のミやハ、朱雀院にもきこしめすべき事のはゞかりおほければ、

いかで心をかたてまつらじとおもふとの給ふ也。中将・中つかさ
などハ、めをくハせつゝ、あまりなるむらさきのうへの思ひやり事
かなといひかハす也。むかしハ源氏の思ひ人なりしかど、としごろ
はむらさきのうへにしたがひてゐたれば、みな紫上むらさきのうへに心よせてさ
ぶらひければ、女三のミやをねたましくおもふ也。

一、「こと御かたゝく、よりも」とハ、花ちる里・あかしのうへなど、い
かにおぼすらんと、おもむけて、とぶらひ給ふを、かくをしはかる
人こそ中々心ぐるしけれ、よの中ハつねなき物なれば、なにゝさ
のミハなげくべきと、むらさきのうへの給ふ也。「入給ひぬれば」と
ハ、よるのおとゞにいり給へば、御31オふすままいりなどする也。
くれなゐのふすまといへる、四方四角にて、うハぎしのくミなどあ
る也。ねいられ給ハぬまゝに、すまのうらに源氏くだり給し事など
おぼし出るに、いまハかけはなれ給ても、おなじよのうちにだにきゝ
たてまつらばと、むらさきのうへおもひながし給ふ也。

一、「わが身までの事ハをきて」とハ、源氏のすまにくだり給し時は、
わがいのちにかへんと、おしくかなしかりしをと、思ひくらべ給
ふ也。引哥、いかにぞとおもふ心のある時ハわが身をゝきて人ぞか
なしき。

一、「そのまぎれに、われも人も」とハ、源氏、すま・あかしにおハし
ましたる源氏か、むらさきのうへのか、いのちたえはて給たらば、いふか
ひあるべき事か、すこしのよがれなどをふかくうらみじと思ひなを
し給ふ也。かぜうちふきて、ねられ給ハぬを、ちかくさぶらう人や
きくらんと、むらさきのうへ、うちみじろきもせず、くるしくおほ
す也。〈31ウ〉

一、「かの御ゆめに」とハ、源氏のゆめに、むらさきのうへみえ給けれ
バ、うちをどろきて、とりのねまちいで給へば、いそぎいで給ふ也。
一、「いといはけなき」とハ、女三のミや、おさなくおハしましけれ

ば、めのとたちちかくさぶらひける也。つま戸をしあけて出給ふを見をくり奉る也。

一、「なごりとまれる御にほひ、やミハあやなし」引哥、春のよのやミはあやなし梅の花色こそみえねかやハかくる。源氏の御うつりがハ、むめにもまさりて、やミにもかくれなきの心也。「なをのこれ雪」子城しじやうのかくれたるもの隠所かくせいのまへ猶残雪またかんあらず衝鼓聲がくせいのまへ前未有寒。しのびやかにこのくをげんじくちずさみて、いり給ふ也。かうしうちたゞき給へど、人々そらねして、をそくあげたる也。

一、「おぢきこゆる」とハ、むらさきのうへにおちてこそ、よふかくかへりたれと、源氏の給ひていり給へる也。32

一、「すこしぬれたるひとへのそで」とハ、むらさきのうへの、御ぞなきぬらし給へるをひきかくして、さすがにうちとけぬよういなどはづかしげにみえ給へる也。「ようい」、用心也。

一、「かぎりなき人」とハ、女三のミヤの、内親王といひても、むらさきのうへにならび給ふまじきと、源氏おぼしくらべ給ふ也。

一、「えわたり給ハで」とハ、女三のミヤのかたへハ、御ふミばかりまいらせ給へる也。

一、「けさのゆきにあやまりて」とハ、ゆきに心ちたがひて、なやましきを、心ちためらひ侍ると、ふみにかき給ふ也。「ためらひ」とハ、心ちたすくる心也。

一、「院にきこしめさんことも」とは、朱雀院のきこしめん事も、いかゞあらん、このごろばかり女三のミヤによがれなくつくろはんとおほす也。

一、「をんなぎミ、おもひやりなき」とハ、むらさきのうへ、源氏女三のミヤによがれ給ふは、しかるべからぬ事と、くるしおほす也。32

一、「ミヤの御かたに」とハ、女三のミヤに、ふミたてまつり給ふ也。

一、「中ミちをへだつるほどはなけれど心みだるゞけさのあはゆ

き」。人めして、にしのわたどのよりたてまつらせよとの給ふ也。

一、「そでこそにほへ」、引哥、おりつればそでこそにほへむめの花ありとやこゝにうぐひすのなく。

一、「をんなぎミに」とハ、むらさきのうへに、花ミせたてまつり給ふ也。

一、「花といはゞ、かくこそ」とハ、梅のやうにこそ、にほハまほしけれ。さくらにうつしてハ、又ちりばかりも心わくるかたなくやあらんと、げんじの給ふ也。「これもあまたにうつらぬほど」ハ、梅もさくらにならべて見ぬほどこそおもしろからめ、さくらのさかりにならべて見ばやと、むらさきのうへの給ふ也。

一、「御かへり」とハ、女三のミヤのふミのかへり、くれなゐのかみにをしつゝみて、をこせ給へるを、てなどおさなきを、むらさきのうへにしバしみせたてまつらじとおぼしつるに、あハくしきやうならんと、げんじおほす也。「あハ33あハしき」とハ、かるゞしからんと也。ひきかくし給はんも、むらさきのうへ心をき給ふべければ、かたそばひろげ給へるを、しりめにむらさきのうへ見をこせて、そひふし給へる也。

一、「はかなくてうはのそらにぞきえぬべきかぜにたゞよふ春のあハゆき」、むらさきのうへに心をげんじわけ給へば、われハうハの空にてこそきこゆべけれと、女三のミヤよみ給へる也。

一、「さばかりのほどになりぬる人」とハ、おとこも給ふほどになりたまへる人のてにてハ、いとほかなきと、紫上むらさかみ給へど、見ぬやうにてまぎらハし給へる也。

一、「こと人のうへならば、さこそあれなど」、むらさきのうへに、源氏かたり給ふべけれど、女三のミヤの御事ハ、たゞ、心やすくおもひなし給へとばかりの給ひ、なぐさめ給へる也。33

一、「けふハ、宮の御かたに」とは、女三のミヤの御かたに、源氏、ひ

るわたり給たる也。

一、「此御ありさま、ひと所こそ」とハ、源氏の御ありさま、ひとりこそめでけれ、むらさきのうへにねたまれ給はんがめざましからんと也。

一、「をんなぎミハ、おさなきほどに」とハ、女三のミヤハ、おさなくおハしますに、ことくしくよだけき御さうぞくなれば、御ぞがちに、身もなきやうに見え給ふと也。「よだけく」とハ、よにことくしきといふ心也。

一、「たゞ、ちごのおもきらひせぬ」とハ、おさなき子のおもきらひせず、たれにもゐだかるゝやうなると也。女三のミヤの御ありさま也。

一、「院のみかどは、すくよかなる」とハ、朱雀院ハ、もんざいなどの御ことこそ、心もとなくおハしましたけれ。おかしきすぢハ、人にまさり給たるとおほゆるに、などてかく女三のミヤおひらかにおほしたて給ひつらんと、源氏おほす也。「おひらか」とハ、ねをびれたるやうに心もちおほつかなくのミ見え給ふと也。院のおもひ子にておハしましたるときゝしをと、くちをしくおほす也。たゞ、なよくとなびきて、御いらへをも、おほえ給ふ事ハ、うちの給て、ゑミはなたずおハしますしける。むかしの心ならば、見おとりし給ふべけれど、いまは、よをおもひなだらめて、とあるもかゝるも、きハはなるゝ事ハあらずと、源氏おほす也。

一、「よそのおもひハ」とハ、大かたのおほえハ、女三の宮かくこそあらまほしきおほえと、源氏おほさるゝ也。

一、「さしならびめかれず」とハ、むらさきのうへへのふだん見給ふに、としごろよりも、ありがたくおほさるゝハ、われながらよくおほしたてたると、源氏おほさるゝ也。ひとよのほど、あしたのまも見たてまつり給ハぬハ恋しきと也。

一、「院のみかどは、月のうちに」とハ、朱雀院ハ、二月のうちに、

御てらにうつり給ハんと也。「ミてら」ハ、仁和寺也。

一、「この院に」とハ、源氏に、朱雀院御せうそこある也。「ひめミヤの御事ハさらなり」とハ、女三のミヤの御事ハ、あたらしくの給ふにをよバぬ、いかに、わがきく所やいかにとおほさで、御心にまかせてをしへ給へとの給ふ也。あハれうしろめたくて、かくまでの給ふ也。むらさきのうへにも、御せうそこある也。女三のミヤのおさなくおハしますを、つミなくおほしゆるしてうしろミ給へ。たづね給ふべきゆへもあらんと、朱雀院の給ふ也。女三のミヤの御は、女御と紫上のちゝ式部卿とハ、御兄弟といふ心也。

一、「そむきにしこのよにのこる心こそいる山みちのほだしなりけれ」、女三のミヤに心をのこしをくハ、いるやまみちのほだしとなる也。このよのこを、子にもたせて也。「ほだし」ハ、さハりの心也。

一、「やミをはるけで」とハ、子をおもふやミにまよふと也。

一、「おとゞも見給て」とハ、源氏も此御文ミ給て、「かしこまりきこえ給ふ給へ」とハ、はゞかりおほき御文給ハリしよし申給へと、源氏の給ふ也。

一、「御かへりきこえにく」とハ、紫上、かへりごとかきにくゝおほせど、おもしろき御うたならばこそあらめ。あハれなるおりふしなればと也。

一、「そむくよのうしろめたくハさがりがたきほだしをしみてかけなはなれそ」、女三のミヤ、うしろめたくおほしめさば、なしめてかけはなれて御山こもりなし給ひそと也。「女のさうぞく」とハ、も。からぎぬに、ほそながそへて、御つかひにかづけ給たる也。

一、「御手などのめでたき」とハ、紫上のでを、朱雀院御らんじて、女三の宮のおさなくおハしますを、はづかしくおほさるゝ也。

一、「いまハとて、女御かうい、をのがじ」とハ、朱雀院ミ山こも

りし給へば、女御・かういたち、をのくたちわかれて、わがすみかへにおハする也。

一、「内侍のかんの君」とハ、おぼろ月よハ、あしきさきのすミ給し二条のミヤ35にぞすミ給ける。「ひめミヤにさしつきてハ」とハ、女三のミヤにつきては、おぼろ月よの御事を、朱雀院かへりミがちにおほしたる也。

一、「あまになりなん」とハ、おぼろ月、あまにならんとし給ふを、朱雀院をさほふやうならんと、いさめ給ひければ、おほしとまりたる也。「さほふ」ハ、あらそふ心也。

一、「六条のおとハ」とハ、源氏ハ、おぼろ月よをあかずのミおほしたる御中なれば、いかならんおりにかハ又たいめんせん、よのきみよをはかり給ひつるに、いま朱雀院のミ山ごもりのあとにおハしますころゆかしくおほしければ、大かたの御とぶらひつねにきこえ給ふ。わかへしかるべき中ならねばとて、おぼろ月も、御かへりきこえかハし給ふ也。

一、「むかしよりも、と」のひはてたる御けハひとハ、御文のけしきにて、かたちありさまゆかしくおほされて、中納言の君のもとに、心ふかくつねにきこえ給ふ。「かの人の」とハ、中納言の君の、きやうだいなるいづミのかミをめし36よせて、おぼろ月よに、人づてならず、きこえしらすべき事あるを、さりぬべきやうに申せ、しのびてまいらんと源氏の給ふ也。そこにも、又、人にもらし給ふなとの給ふ也。

一、「かむのきミ、よの中をおもひしるにつけて、むかしより源氏のつらき御心を、おもひつめるとしごころのはてに、あはれにかなしき朱雀院の御事をさしをきて、いかなるむかしがたりをかせんと、おぼろ月よの給ふ也。「おもひつめる」とハ、おもひあつめる也。「人もりきかすとも、心のとらん」、引哥、なきなぞと人にいひてありぬべ

し心のとハ、いかゞこたへん。

一、「なをさらにあるまじきよし」とハ、おぼろ月、あるまじきとの給ふよし、いづミのかミ源氏に申す也。

一、「いにしへわりなかりしよにだに、心かハし給し事なれば、朱雀院の御ためハ、うしろめたきやうにハあれど、「いましもきよまハリ」とハ、36いまさらにきよめだてしても、とりかへされごと、源氏おぼす也。「たにしわが名」、引哥、むらどりのたちにしわがないまさらにことなしぶともしるしあらめや。むかしのうきな、とりかへされぬとて、このしのだのもりをしるべにておハします也。「しのだのもり」、いづミのくにの37名所也。

一、「をんなぎミにハ」とハ、紫上にハ、すゑつむ花のなやミ給ふを、とぶらひにおハしますといひなして出給ふ也。

一、「れいハさしもみえ給ハぬ」とハ、すゑつむ花におハしますにハ、かやうにたきしめひきつくるひなどしハねば、おぼろ月よおハしますらんとおほしよる也。「ひめミヤの御事」とハ、女三のミヤのおハしまししのちハ、なにごとと、へだて心そひ給へば、紫上げんじにたハぶれ事もの給ハぬ也。

一、「しんでんへもわたり給ハず」とハ、女三のミヤの御かたにも、源氏わたり給ハで、ふミばかりかきかハし給へる也。たき物などあハせくらし給ふ也。37

一、「あじろぐるまにてやつれていで給ふ也。いづミのかミして、御せうこし給ふ也。」

一、「あやしく、いかやうに」とハ、いづミのかミ、いかやうに申て、源氏おハしたるか、おぼろ月をどろき給ふ也。

一、「おかしやかにてかへしたてまつらんに」とハ、源氏をいたづらにかへしたてまつらんことならずなど、いづミのかミおもひめぐらしていれ奉る也。

一、「むかしのあるまじき心」とハ、けさう心ハのこらぬと、わりなく源氏の給ふ也。

一、「いたくなげく」とハ、おぼろ月（つぎ）、うちなげきつゝゝゝざりいで給へり。

一、「さればよ」とハ、おぼろ月よの、人げちかくあだくしき心ハ、かハリ給ハぬと、源氏おぼす也。「かたみに」とハ、たがひに、「おぼろけならぬ」とハ、せうくならず、おぼろ月も源氏も、しのび給へば、あハれすくなからぬと也。ひんがしのたいの、たつみのひさしに、源氏すへたてまつりて、「ミさうじのしりはかためたれば」とハ、人のとをらぬほどほそめに（か）あけてかためたる也。わかしくしき心ちするかな。とし月へだる（ま）ほども、まぎれなくおぼゆるをと、うらみより給ふ也。「よいたくふけて、玉もにあそぶをしのこゑく」と、引哥、春の池（いけ）の玉もにあそぶにほとりのあしのいとなきこひもするかな。おぼろ月よを、いとまなくこふるの心地。

一、「へいちうがまねならねど」とハ、さだふんがやうに、そらなきにてハなく、真実になかるゝと也。平中ハ、そらなきしたる也。

一、「これかくて」とハ、さうじを、かためなからバいかゞとて、ひきうごかし給ふ。源氏よミ給ふ。

一、「とし月を中にへだてゝあふさかのさもせがたくおつるなミだか」と、中へだてのさうじを、かくせきとめがたくおつるなミだと也。

「か」ハ、なミだかな也。

一、「なミだのミせきとめがたきしミづにてゆきあふミちハはやくたえにき」。なミだこそ、せきのし水（みづ）のやうに、とゞめがたけれ。あふことは、むかしよりおもひたえたと也。さうじのかためハ、あけがたきと也。（お）

一、「たれにより」とハ、源氏のさせん、たれゆへならん、われゆへとおぼしなして、いま一たびのたいめんハあるべき事と、おぼろ月よ、

おぼしよハるも、もとよりづしやかならぬ心と也。「づしやか」とハ、実（じ）ならぬ心也。

一、「いといたくすぐし給にたれど」とハ、としたけ給へど、むかしおぼえたるたいめん（めん）に、いにしへとをからぬ心ちして、「一かたならぬ、よのつゝましき」とは、朱雀院のミ山（やま）ごりのあとゝいひ、又よのきこえもあらば、かろくしき名をいまさらたてんこと、さまぐおぼろ月おぼしなげく也。

一、「いまはじめたらんよりも」とハ、はじめてあひるをんなよりも、めづらしくあハれにて、いで給ハんそらもなく、源氏おぼしみだるゝ也。

一、「むかしふぢのえんし給し」とハ、あく大臣（だいじん）のふぢの花のえんし給し時、おぼろ月よにうたよミかハし給し時のことおもひいで給ふ也。源氏たちかへり給て、このふぢよ、いかでこのかげをばたちはなるべきと、（お）やすらひ給ふに、あさ日さしあひて、いとゞひかるやうなる御けハひめづらしく、中納言（ちゆうなごん）のきミ見奉る也。「さるかたにて」とハ、おぼろ月よ、源氏の北方（きたかた）にても、見たてまつるべき物を、ミやづかへにも、きハはなれて、女御などにもおハしまさずと、中納言（ちゆうなごん）のきミおもふ也。

一、「こミやのよろづに」とハ、あしきさき（さき）の、源氏にくミ給しゆへに、よのさきに、おぼろ月よもかろくしき名をたて給しと也。

一、「げにのこりあらせまほしき」とハ、げんじをいましバしもとゞめたてまつらまほしくおもへども、御身を心にまかせ給ふまじきに、こゝの人めもいとをそろしければ、いで給ふ也。人めして、ふぢのえだおらせ給て、かくよミ給ふ。

一、「しづミしもわすれぬ物をこりずまに身もなげつべきやどのふぢなミ」、させんせられしも、わすれぬを、こりず、おぼろ月よゆへ身もなげつべきと、源氏の給ふ也。（お）

一、「女君も」とハ、おぼろ月よ、さまぐにおもひみだれ給へる。「花のかげハなをなつかしく」とハ、源氏をあかず、おぼろ月よ、見給て也。

一、「身をなげしふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまのなミ」、源氏むかしもいつハリをぞの給し、いまさらにこりずまに御ことばかけても、たのまじと、おぼろ月よの給ふ也。

一、「心ながらもゆるさぬ事」とハ、おぼろ月よのゆるし給ハぬ事と、源氏おぼしなから、「せきもりのつよからぬ」とハ、朱雀院のたちそひ給ハねば、いとよくかたらし給ふ也。「たゆミに」とハ、ゆだんの心也。

一、「そのミも」とハ、むかしも、おぼろ月よを人よりまさりて、源氏おぼしめしつれども、はつかなるほどにてやミ給しに、いま又ほのかに見たてまつり給へば、あハれすくなからぬと也。

一、「いミじくしのびいり給へる」と、紫の上の御かたに、源氏いり給へる也。³⁹

一、「をんなぎミハ、さばかりならん」とハ、むらさきのうへハ、おぼろ月よに源氏おハしましつらんとおぼせど、おぼめかしきやうにておハする也。

一、「中くうちふすべなどし給へらん」とハ、紫のうへ、ふすべなどしてはらたてなどし給はんよりも、しらずがほにておハするを、源氏心ぐるしくおぼす也。

一、「ありしよりけに」とハ、むらさきのうへに、いよくありしにまさりて、ふかきちぎりをのちのよかけて、源氏の給ふ也。

一、「かんのきミの」とハ、おぼろ月におハしましたる事も、むらさきのうへにかたり給ふ也。はつかにたいめんありし、いかで人とがむまじきやうに、いまひとたびあひミたきと、源氏かたり給ふ也。

紫 上うちわらひて、むかしをいまにあらためくハへ給ふほど、な

かぞらなる身くるしとの給ふ也。引哥、いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしをいまになすよしもがな。⁴⁰

一、「かう心やすからぬ御けしき」とハ、むらさきのうへ、心かハリ給たるやうなるが心ぐるしきと、源氏の給ふ也。「おいらにひきつミ」とハ、まことにわれをひきつミなどし給ても、あしからんことをしへ給へと、げんじ給ふ也。たがひへだて心なく紫の上をもならハしたればとの給へる也。むらさきのうへの心をとりに給ふほどに、おぼろ月よにおハしましたる事、のこることなくうちかたり給ふ也。

一、「ひめミの御かたにも」とハ、女三のミの御かたにも、わたり給はず、むらさきのうへをこしらへきこえ給ふ也。「こしらへ」とハ、なぐさめ給ふといふことば也。

一、「ひめハなにとも」とハ、女三のミやハ、むらさきのうへをなにともおぼさぬを、うしろの女房たちぞやすからぬこといひあへりける。

一、「わづらハしうなど」とハ、女三のミや、むらさきのうへをねたミ給ふ心あらバ、まして心ぐるしかるべき、おひらかにおハしませバ、うつくしきもてあそびと、げんじおぼさる也。「おひらか」とハ、ねをびれたるやうに、ほけくとおハする也。

一、「きりつぼの御かた」とハ、あかしのひめぎミハ、入内のち、六条院まで給ハぬ也。心やすくならひ給て、きんちうにおハしますを、くるしがり給ふ也。

一、「なつころなやましよう」とハ、懷妊心になやミ給ふ也。いとあへかなる御ほどに、くわいにんをゆしくたれもくおぼす也。「ゆしく」とハ、いまくしく也。

一、「からうじてまかで給へり」とハ、辛勞して御いとまゆるされて、まかで給へる也。「ひめミのおハします」とハ、女三のミのすミ給ふ、おととのひんがしおもてに、御かたしてあかしのひめぎミお

ハします也。あかしのうへ、いまハひめぎミにそひておハするも、あらまほしきやうなると也。

一、「たいのうへ」とハ、紫^{むらさき}上^{のうへ}、しんでんにわたり給て、ひめぎミにたいめんし給ふ也。此つゝるでに、女三のミヤにも、なかのとをあけて、たいめんし給ハんといひおほす也。かねてよりさやうにおもひしと、源氏に紫^{むらさき}上^{のうへ}の給へる也。

一、「うちゑミ」とハ、源氏、おもふやうなるべき御かたらひにこそあんなれ。いとおさなげに女三のミやおハしませば、うしろやすくをしへ給へと、ゆるしきこえ給ふ也。「ミヤよりも」とハ、女三のミヤよりも、あかしのうへを紫^{むらさき}上^{のうへ}はづかしくおほせば、御ぐしすましひきつくるひ給ふ也。

一、「おとと」とハ、源氏ハ、女三のミヤの御かたにわたりて、紫^{むらさき}上の、しげいしやにたいめんせんつるでにちかづきたてまつりなるとの給ふを、ゆるしてかたらひ給へとの給ふ也。まだむらさきのうへ、わかくて御あそびがたきにもつきぐしからんとの給ふ也。

一、はづかしくこそあらめと、女三のミヤの給ふ也。なに事をかハきこえんと、おひらかにの給ふ也。「おひらか」とハ、ねをびれたるやうにの給ふ也。

一、人のいらへは、ことにしたがひてこそおほしいでめ。へだてをかかず、むらいさきのうへの給ひあハせよと、げんじをしへ給へる也。女三のミヤとむらさきのうへなかくてすぐし給へかすと、源氏おほす也。「うるハしくて」とハ、真実しんじつに中よくおハせよかしの心也。「なに心なき御ありさまを」とハ、女三のミヤおさなきを、むらさきのうへにミせ奉らんハ、はづかしきとおほす也。

一、「さの給ハんを」とハ、むらさきのうへ、かくの給ふを、心へだてんもあひなしと、源氏おほす也。「あひなし」とハ、あぢきなし也。一、「われよりかミなる」とハ、むらさきのうへ、われよりうへの人ハ

あらじとおほすを、おさなき時より源氏にあつかハれたてまつりたるばかりこそくちをしけれ。わが身になんつけ所ハなきとおほす也。手てならひなどするにも、物おもハしきすぢのかゝるハ、さらばわが身に物おもひのつきたるよと、ミづからおほししらるゝと也。

一、「院わたり給て」とハ、源氏、「ミヤ、女御などの」とハ、女三のミヤ、あかしのいひめぎミなど、かたちよしと見給ふめうつしにハ、年としごろめなれたるむらさきのうへたぐひなく見え給ふハ、ありがたき事と、源氏の給ふ也。

一、あるべきかぎり、けだかう、花やかにいまめかしく、さまぐとありあつめたるさかりにみえ給ふ。こそよりことしハまさり、きのふよりけふハめづらしく、つねにめなれぬさまし給へる、いかでかくしもあらんとおほす。むらさきのうへの御てならひを見給ふに、わざと上うずにかき給へるかなと見給ふ。「らうくじく」とハ、勞功ろうこう入てミゆる也。

一、「身にちかくあきやきぬらんみるまゝにあをばの山もうつろひにけり」、むらさきのうへ、源氏のあき心まさり給ふか、あをばの山もうつろふとよミ給へる也。げんじをあをあの山やまにあてゝの給ふ也。

一、「ミづとりのあをばゝ色もかハラぬをはぎのしたこそけしきことなれ」、われハ心かハラぬを、紫むらさきのうへこそけしきことにみえ給へと也。はぎはぎハ、むらさきにさく花なれば也。又、「水鳥のあをば」とハ、かものあをば也。かくむらさきのうへのてならひに、げんじかきそへ給たる也。

一、ことにふれて、心ぐるしきけしきミゆるを、紫^{むらさき}上色にいださじとおもひけち給へるもありがたく哀あはれと、げんじおほす也。

一、「こよひハいつかたにも」とハ、むらさきのうへも、あかしの女御むすめの御かたにおハしませバ、御いとまありとて、源氏おほる月よに又いで給ふ也。あるまじき事と、おほすにも、かなハずしておハしま

す也。

一、「春宮の御かた」とハ、あかしの女御ハ、あかしのうへよりも、むらさきのうへをむつまじき物にたのミ給へる心ばへ、うつくしくおとなびまさり給へる也。

一、「なかの戸あけてミヤにも」とハ、女三のミヤにもたいめんし給へる也。いとおさなげに見え給へば心やすくて、紫上ハ、おとなしくおやめきたるさまに、「むかしのすぢをたづね給ふ」とハ、女三のミヤの御は、女御は、むらさきのうへのおぼにておハせしよしの給ふ也。「中納言のめのと」とハ、女三のミヤの御めのと也。「おなじかざし」とハ、紫上のち、式部卿のミヤと、女三の宮の御は、と、兄弟にておハしますといふ事也。連枝といふ也。はらかなの事也。つらなるえだともいへる也。女三のミヤをゆかりときこゆるハ、かたじけなけれど、紫上の給ふ也。「かたじけなき」ハ、はゞかりなれどもと也。

一、「あなたなどにも」とハ、むらさきのうへの御かたにも、女三のミヤわたり給ふやうにとの給ふ也。

一、「たのもしき御かげども」とハ、女三のミヤ、は、女御にも朱雀院にも、をくれ給て、心ほそくおほさるゝに、かくむらさきのうへゆるしての給へば、ます事なくおもふと、中納言申す也。

一、「そむき給しうへも」とハ、朱雀院の御心むけも、むらさきのうへの御心へだてなく、女三のミヤになに事もをしへ給ふやうにとの給ハせたと、⁴³めめのと申す也。「うちくにも」とハ、内々も、さやうに女三のミヤおほすと也。

一、「いとかたじけなき御せうそ」とハ、朱雀院より御文給ハリしのうちハ、いかにとのミ女三のミヤに心ざしをあらハしたてまつらんとおもへども、かずならぬ身ハくちをしきと、紫上の給ふ也。「ミヤにも」とハ、女三のミヤにも、御心につき給ふべく、⁴⁴などのこと

ひるなあそびの事など、むらさきのうへの給ふ也。

一、「げにいとわかく心よき人かなと、むらさきのうへの事を、女三のミヤおさな心ちにうちつけ給へる也。このうちハ、御文かよひ、おかしきあそびわざなどにつけてきこえかハし給へる也。

一、「かばかりになりぬる」とハ、女三のミヤとむらさきのうへの御中をいひあつかひて、紫のうへいかにおぼすらんなどいひけるを、いますこし源氏の御心ざしまさるやうになりければ、又やすからず女三の⁴⁴ミヤやおぼすらんなどいひけるに、かくにくからずいひかハし給へば、ことなをりて、めやすくなありける。

一、十月に、むらさきのうへ、源氏の御賀に、さがのゝみだうにて、やくしほとけくやうしたてまつり給へる也。

一、「ほとけ、きやうばこ、ぢすのかざり」とは、きやうをつゝむす也。帙篋也。「まことのごくらく」とハ、生身のみだの浄土也。さいせうわうきやう、こんがうはにや、じゆみやうきやう、これみなきねんによミ給ふきやう也。「ゆたけき」とハ、ゆたかなる御いのりといふ心也。

一、「かたへハきほひ」とハ、みちすがらの野べの花、もみぢの、おもしろき見ものなるに、過半は人々あつまり給へると也。

一、「野はらのまゝに」とハ、のをもそのまゝ、みちにゆく心也。

一、「みじゆきやうわれも」とハ、佛布施、われもくと、源氏のきた⁴⁵のかたちし給へる也。「廿三日としミの日」とハ、としいミの日なり。としいミの日にまひかなであそび給ふ事ハし給へる也。

一、「此院ハ」とは、六条院ハ、かくせはきほどすミみち給へば、むらさきの上のわたくしのとのおぼす二条院にて、舞樂のまうけハし給ふ也。

一、「御さうぞくの事」とハ、源氏の四季の御衣裳也。「こなたに」とハ、むらさきのうへし給ふを、きたの御かたちも、さるべき事と

も、わけてのぞミ給てし給ふ事どもあると也。

一、「たいどもハ」とハ、ひんがしのたい、にしのたい、人々のつほねにすミたるをみなはらひあけて、てん上人、諸大夫のいんしなどの座にし給たる也。これハみな、六条院をつかさどる役者也。

一、「しんでんのはなちいで」とハ、もやをかざりて、らでんのゐしたてたり。かいすりたるゐし、これハ、源氏の御座也。「おとゞのにしのまに」とハ、⁴⁶御殿のにしのまに、御ぞのつくゑ十二にたて、なつゆ十二月の御よそひ、御ふすまなど、むらさきのあやのおほひし給たる也。「うるハしう」とハ、花麗にみえたる也。「うち心あらハならず」とハ、おほひせられたれば、うちハあらハにみえぬと也。

一、「をき物のつくゑ」とハ、さまぐの御てうどをかるゝ也。「からのちのすそ」とハ、からのをり物也。すそをむらさきにそめたる也。「かぎしのだい」とハ、かんざしをくだい也。金銀の山水花樹等也。又、「ぢんのけそく」とハ、ぢんかうの木にて、花をほりたるだいに、こがねのとり、しろがねのえだにゐたるを、しげいしやせさせ給へる也。「しげいしや」、あかしの女御也。あかしのうへの給ひつけて、せさせ給へる也。ゆへふかく、心ことなると也。

一、御屏風四ぢうハ、式部卿のミやせさせ給へる也。紫上の御ちゝ式部卿也。四季のゑなれど、めづらしきせんすい、だんなどかきたる也。「せんすい、⁴⁶だん」とハ、庭のだんぐををかきたる也。

一、「きたのかべにそへて、をき物のミづし」とハ、御てうどゝもをかるゝ也。

一、みなミのひさしにかんだちめ、ひだりみぎの大臣、式部卿のミやははじめ、つきぐの人々まゐり給ハぬ人なきと也。

一、「かくにんのひらばり」とハ、かくやむねもあげず、ひらに日かくしはりたる也。

一、「とんじき」とハ、げらうのしよく物いれたるひつ也。屯食と書也。

一、「まんざいらく、わうしやう」、祝言の樂也。「こまのらんじやう」とハ、かねたいこならずこと也。「こま」ハ、かうらいのがく、みぎかた也。

一、「らくそん」とハ、いりあやに、おにのおもてかけて、まふ也。

一、「ごんちうなごん、ゑもんのかミ」とハ、夕ざり、かしハ木おりて、入あやまひ給ふ也。

一、「朱雀院の行幸」とハ、もみぢのがのまきに、源氏と内府と、せいがい⁴⁶はまひ給しやうに、いま又、かしハ木と夕ざりおとらずたちつゞき給けるよゝのおぼえなど、おさぐおとらずと、人々の給ふ也。

一、「つかさくらゐ」とハ、源氏・内府のくはんしやくよりハ、夕ざり・かしハぎハ、まだわかよりくらゐたかくすゝみ給たる也。

一、「あるじも院も」とハ、源氏も、あハれになみだぐみ給て、おほしいづる事さまぐおほきと也。

一、「かくにんまかづるに」とハ、樂人にひきいで物とらせ給へる也。

一、「きたのまん所」とハ、むらさきのうへの事也。撰家のをば、北の政所と申也。「別當」とハ、いへつかさをいへる也。

一、「しろき物どもをかづきて」とハ、しらぎぬどもかづきて、いけのつゝみすぐるほどのよそめハ、千とせかねてまひあそぶつるのけごろもにまがひたると也。引哥、むしろ田の、いつぬきがハに、やすむつるの、や、二だん、⁴⁶すむつるの、や、すむつるの、ちとせかねてぞ、あそびあへる、よろづよかねて、あそびあへる。むしろだ、ミのゝくに也。

一、「御あそびはじまりて」とハ、御前のおそび也。「御ことゝも」ハ、春宮よりとゝのへさせ給たる也。むらさきのうへに、春宮よりの御

心ざし也。

一、朱雀院より春宮給ハリ給たるびわ、きんのこと、うちより給ハリ給へるさうの御こと、みなむかしおぼえたる物のねどもにて、おもしろきと也。「すぎにしかたの御ありさま」とハ、むかし恋しく源氏おぼしめしいづる也。

一、「入道にうだうのミヤ」とハ、ふぢつぽおハしまさバ、御賀の事、すゝミつかうまつるべき物をと、源氏おほしいづる也。なに事につけても、ふぢつぽに心ざしみえたてまつらぬ事を、くちをしくおほしいで給ふ也。

一、「うちにも、こミヤの」とハ、ふぢつぽのおハしまさぬことを、くちおしくにうさうさうぐしくおぼさるゝに、「此院の」とハ、源氏の御事を、「あとあるさまのかしこまりを」とハ、朝観あさみんの行幸ぎやうかうもあらんとおぼさるゝを、此心ざしをあらハしてみせ給ハぬと、あかぬ事におぼさるゝと也。朝観あさみんとハ、春秋、院に行幸ぎやうかうありて上皇じやうかうをおがミ給ふ事也。さやうにげんじに礼儀れいぎつくしてミせ奉らぬ事を、冷泉院れいぜんいんおぼさるゝ也。

一、此御賀ごがにことつけて、ミゆきあらんとおぼしめしけれども、源氏よのわづらひならん事ハ、せさせ給ふまじくいなび申させ給へば、おぼしとまり給て、「中宮ちゆうぐうまかでさせ給て」とハ、六条院ろくじょういんに秋好あきこのむ中宮ちゆうぐういで給て、ならの七大寺しちだいじにすぎやうの、ぬの四千せんだん、このちかきミヤこの四十寺しじゅうしじにきぬ四百ひゃくよひ疋びをわかちてせさせ給ふ也。

一、「ありがたき御はぐゝミ」とハ、中宮ちゆうぐうになり給ふ事も、げんじのはぐゝミと、あきこのむおほす也。なに事につけてふかき心ざしを、げんじげんじにミせ奉るべきぞとおほす也。「ちゝミやはゝミヤす所」とハ、前坊ぜんぼうと六条のミヤす所のおハしまさば、がをし給ふを、その御心ざしをとりそへて、げんじの御がを一かどせんと中宮おほしけれど、源氏みかどにもきこえかへし給へば、なに事もとゞめさせ給

へる也。

一、「四十のがといふ事ハ、さきぐゝも」とハ、仁明天皇にんみんてんわう、四十の賀し給て、四十一にて崩御ほうごし給ふ。天曆てんりやくのみかど、四十の御賀ごがし給て四十二にてかくれ給し。かやうのれいあればと、源氏このたびハ賀のもよほしとゞめ給て、「のちたらんとし」とハ、五十の賀がをせさせ給へとの給ふ也。

一、「おぼやけざまにて」とハ、みかどの代に、中宮し給ふ事なれば、いかめしき事どもありけると也。

一、「ミヤのおハしますまち」とハ、ひつじさるのまち也。

一、「大きやうにならずらへて」とハ、中宮のせさせ給ふ御賀なれば、公事こうじ（給ふ）にならずらへて、親王・公卿しんわうこうけいのろくども、女のさうぞく。「非参議ひさんぎの四位しじまうちきんだち」とハ、撰家せんけの御息ごせきたち也。たゞの殿上人でんじやうじんには、しろきほそながひとかさね。「こしざしなごまで」とハ、まきゝぬハ、給ハリてこしにさしはさむゆへ、こしざしといへる也。

一、「名たかきおび」とは、雲形うんぎやう、花形かぎやうなどいへる御おび也。「前坊の御かたさまにて」とハ、中宮の御ちゝ前坊よりつたハリまいり給たるもあハれにミゆる也。

一、「ふるさよのいちの物」とハ、上代の第一の名ある物ハ、此源氏の御賀ごがつどひまいりたる也。

一、「むかし物がたりに」とハ、延長四年、七大寺しちだいじにみずきやうの功德くつどく銭せん施入せにゅうし給し心をもて、かける也。東大寺とうだいじ、興福寺きふくじ、元興寺げんきやうじ、大安寺だんあんじ、薬師寺やくしじ、西大寺さいだいじ、法隆寺ほうりゆうじ。

一、「物えさせたるをかしこき」とハ、明君政設利めいくんせいせつり以致い之（はげむ）。「むかし物がたり」といふより記者也。「うるさくて、こちたき」とハ、実じつにしてことぐしければ、かきのこしたると也。

一、「おぼしめてし事ども」とハ、みかど、源氏の御賀の事おほしめしそめたる事、やめ給ふべき事ならぬとて、夕ゆふぎり（は）にの給ひつけて、

源氏の御賀せさせ給ふ也。

一、「右大将、やまひして」とハ、右大将、職を辞退し給へり、夕ぎり任じ給ふ也。源氏の御賀のほど、よろこびくハへ給ふ也。

一、「院も」とハ、源氏も、よろこび給へる也。「いちはやき」とハ、人よりいちはやく、夕ぎり位すゝみ給ふと、源氏の給ふ也。

一、「うしとらのまちに」とハ、花ちる里におハしますまちに、この御賀夕ぎりとりをこなひ給ふ也。

一、「けふはたことに」とハ、みかどのせさせ給ふ御賀なれば、ぎしきへおまさりて、「所々のきやうなど」ハ、八省諸司にわたりて配當し給ふ饗膳など、くらづかさ、こくさうみんよりつかうまつらせ給ふ也。「こくさうみん」とハ、五こくおさむるくらの奉行也。

一、「頭の中將、せんじうけ給はりて、つかうまつらせける。」頭中將、「たれともなし。」「みこたち五人」、此人々たれともなし。

一、「おほきおと」とハ、内府、くハしくせんじうけ給はり給て、とのへ給へる也。

一、「院もいとかしこくをどろき申給て、御座につき給ぬ。」「もやの御座にむかへて」とハ、内府の御座ありて、つき給へる也。「此おと」とハ、この内府ぞさかりとみえ給ふ。「せうとく」とハ、宿徳とかけたる也。徳・爵・齡の三つをかねたるを、せうとくといへる也。

一、「あるじの院」とハ、源氏ハ、あまりわかくみえ給ふと也。

一、「屏風四ぢう、うちの御手かゝせ給へる。冷泉院勅筆也。」
一、「からのあやのうすだんに、したゑのさま」とハ、「うすだん」ハ、うすだも也。絹屏とて、きぬにてはる也。「春あきのつくりゑ」とハ、さいしきゑ也。「此屏風のすみつき」とハ、詩哥などあそびしたるすみつき、ゑよりもかゞやくやうなると也。

一、「をき物」ハ、御てうじ也。「ひき物」ハ、こと・ひわなど也。「ふき物」、ふえ・ひちりきなど也。「蔵人所」とハ、御くら奉行也。「大

將の御いきほひ」とハ、夕ぎりのいきほひ、いかめしうなり給たる也。

一、「御馬四十疋、左右のむまづかさ、六衛ふの官人、」
一、「かみより」とハ、むまのかみ、さまのかみより、つぎくひにきとへのたる也。「六衛ふ」とハ、左右の大將、左右衛門、左右の兵衛。これを六ゑふといへる也。「くはんになん」とハ、ぜう、さくはんをいふ也。

一、「まんざいらく、がわうをん」、祝言のまひ也。御せんの御あひひそぎへおまさり給ふゆへに、楽所のまひハけしきばかりなると也。

一、「おととのわたり給へるに」とハ、内府おハしたるに、もてはやされて、御あそびめづらしくて、みな人心いれてあそび給へる也。びわハ、ほたる兵部卿、ありがたき物の上ずにて、いとになし。源氏のおまへに、きんの御こと、内府の御まへに、わごんまいる。としごろそひぬる御みゝのきゝなしにや、いというにおぼさるゝに、源氏のきんも、おさく御手かくし給はず。「おさく」ハ、長也。

一、「いまはたかゝる御中らひ」とハ、夕ぎりむことにとり給て、内府と御中いよくむつまじくて、心よくきこえかハし給へる也。

一、「御をくり物に、すぐれたるわごんひとつ、このミこまぶえそへてしたんのはここにいれて、からの本ども、内府に奉り給ふ也。」「から本」とハ、書籍也。「この本」とハ、かなざうしなり。
一、「右のつかさども、こまのがく」とハ、みぎハ、かうらひのがく也。「六ゑふの官人」とハ、大將のしたづかさなれば、ろくとりわき給ふ也。

一、「御心そぎ給ふ」とハ、源氏、よのわらひならんことハと、のぞき給へど、みかどのせさせ給へる賀なれば、いかめしきと也。

一、「大將のたゞひと所」とハ、夕ぎりのひとり子を、源氏さうくくしこおほしつれど、人にすぐれ給へば、かたはらにならぶ人なき也。

一、「かの御はゝきたのかた」とハ、あふひのうへの、ミやす所のうら

みふかく、いどミ給しかども、すゑハ齋宮のおほえたかく、きさきになり給たる也。夕ぎりハ、臣下にてこそおハしけれ。かくよの中ハさだめなきと、源氏思めぐらし給ふ也。

一、「こなたのうへ」とハ、花ちる里、夕ぎりのさうぞくし給へる也。

一、「三条の北方のいそぎ給ふ」とハ、雲井のかりハ、官人のろくどものこと（いそぎ）ばかりをし給ふと也。

一、「こなたにハ、たゞよそのやうに」とハ、花ちる里ハ、六条院のうちながら、むらさきのうへの御かたのことをよそぎ（つこ）給しに、此御賀を夕ぎり花ちる里のまちにてをこなひ給しにゆへ、物くしきことを見給ふとおほさるゝ也。としかへりぬ。源氏四十一歳也。

一、「きりつぽの御かた」とハ、あかしの女御、さんし給ハん事ちかくなり給へるとて、正月ついたちころより、ミずほうだんにし給へる也。

一、「おとゞの君、ゆゝしき事」とハ、あふひのうへのさんし給ひし時、わづらひ給ひしを、ゆゝしくおほしたるゆへに、ひめぎミの御事を大事とおぼして、いのりさまく（く）にせさせ給へる也。

一、「たいのうへ」とハ、紫上の、子をもち給ハぬハ、さうくしくおほせど、子をうミ給ハぬハ心やすき（やすき）源氏おほす也。（いそぎ）

一、「まだいとあへかに」とハ、明石の女御、十四歳にておハすれば、いかゞと也。

一、「ミけしきかハりて」とハ、さんし給ふべきけしきみえたと也。

一、所かへてとつしミ給へと、おんやうしども申ければ、あかしのうへのかたへ、ひめぎミわたし給へる也。「こなたハ」とは、明石上の御かたハ、おほきなるたいのやふたつばかりなると也。

一、「だんひまなくぬりて」とハ、ごまたき給ふだんぬりたる也。

一、「はゞぎミ、此時」とハ、明石上、わがさいはひのほどみえんとおぼす也。

一、「かの大あまぎミ」とハ、明石のあまぎミ、ほけくしくなり給ひて、ひめぎミの御ありさまをゆめのやうにおもひて、ちかづきミたてまつり給へる也。「此はゞぎミハ」とは、明石上ハ、むかしあかしにてひめぎミむまれ給し事なごきかせたてまつり給ハざりしを、あま君ふるめかしき事どもを、かたりきこえ給ふ也。（いそぎ）

一、「あやしくむつかしき人かな」とハ、ひめぎミ、はじめハあまぎミをいやしく見給ひつれど、やうくあハれとおほす也。「あやしきは、いやしき也。

一、「かゝる人ありとばかり」とハ、あかしのうへのはゞぎミありと、ひめぎミほのかにきゞ給しを、いま見給ひて、なつかしくもてなし給へる也。

一、「むまれ給し」とハ、明石のうらにての事、あまぎミかたり給へる也。

一、「いまハとてのぼり給しに」とハ、源氏歸京の時、入道あかしのうへなど、心をまどハしなげきつれど、ひめぎミひきたすけてこそ、かくまで京にのぼりてさいはひを見たてまつると、あまぎミの給へる也。

一、「むかしの事を」とハ、あまぎミのあかしのうらの物がたり、きかせずバ、おぼつかなくてすぎぬべかりけるよと、女御哀におほす也。

一、「心のうちにハ」とは、ひめぎミ、わが身ハ、うけばりて、源氏のむすめと心おごりすべきほどにハあらざりけり。むらさきのうへの御もてなし（いそぎ）にみがきたでられて、人のおもへるさまも、ことなるなんめりとおほす也。「うけばりて」とハ、をしはりてといへる心也。「身を又なき物におもひて」と、又うへなきやうに身をおもひて、ミやつかへにも、かたへの人をおもひけち、心おごりせしを、よ人ハ、したにそしりいひしこともやあらんと、いまおほししらるゝ

と也。

一、「はゞぎミをば」とハ、明石上あかしうへを、おほえくだれるとハ、女御しり給ひながら、むまれ給たる事、あかしのうらにてとハしり給ハざりつるに、あまりあかしのうへおほどき給へるゆへと、女御おぼす也。

「おほくし」とハ、おぼつかなき事と也。

一、「かの入道」とハ、あかしの入道、仙人せんじんの、よにいでぬやうなるとき、給ふにも、女御かたぐあハれうちながめておハする也。

一、「おかたまいり給て」とハ、明石上あかしうへまいり給て、日中ひちゆうのかぢに、げんじやたちまいりつどひたるに、ひめぎミのおまへに人もさぶらハで、あまぎミの53おまへに所えておハする。見ぐるしやとの給ふ也。かぜさハがしきに木丁きぢやうのほこびほこびに、人やひめぎミ見たてまつりつらんなどゝの給ふ也。

一、「くすしなどのな」とハ、あま君あまぎ、くすしのやうに、女御の御そぼちかくまいり給ふ。見ぐるしきと也。「いとさかりすぎ」とハ、女御の御座みざさ、あまりさかり過ておハしますと、あかしのうへの給ふ也。あまぎミとすこしかたらひ給ふゆへ、下座げざによりてゐ給たる也。

一、「よしめきそして」とハ、あまぎミ、しゐてよしめき給へど、みなどもうくとおほめき給て、あかしのうへの物の給ふを、あくとかたぶきてき、給ふ也。「もうく」と、みはれくしくもきこえぬ也。さるハ、さいふほどのとしばへにもあらず、六十五六むつろくのなると也。「あますがたかハラかに」とハ、じんじやうにあてやかかなると也。「めつやゝかに」とハ、なきはれ給たれど、めのわたりきよげなるの心也。あまぎミ、むかしの事おもひいで給たるけしきと、53あかしのうへミ給ふ也。女御ハ、なまめかしきけしきにて、しづまりておハするさま、いとをしき事をあまぎミかたりきかせたてまつり給て、おほしみだるゝにやと、明石上あかしおぼす也。

一、「御くらるをきハめ」とハ、女御おうて、きさきになり給てより、あかし

にてむまれ給しことをきかせ奉らんとおもひし物をと、おぼす也。

一、「おほしすつべきにハあらねど」とハ、女御、身をいやくおほしすつる事ハあるまじけれど、あなかにてむまれたると、心おとりやし給はんと、あかしのうへいとをしくおほさるゝ也。

一、「御くだ物など」とハ、しよくもつなどを、女御に明石上あかしうへすゝめ給へる也。

一、「かほハゑミ」とハ、あまぎミ打ゑミて、くちつきなどミぐるしく、まゆわたりうちしぐれて、ひそミ給へる也。「ひそミ」とハ、まゆをしバめてなき給ふ也。54

一、「かたハラいた」とハ、そばあたりの人めも、心いたまじと、あかしのうへ、めく巴塞し給へど、あまぎミハきゝいれず。

一、「おひのなミかひあるうらにたちいでゝしほたるゝあまをたれか」とがめん、あまぎミ、かゝるめでたきよにたちいでゝ、ながらへたるかひある身をたれか」とがめんと、よミ給へる也。あまのひろふかひをたちいれて也。

一、「むかしのよにも」引、九十以上七歳以下、雖有死罪不加刑くげうじじやうちさいいけしきありたへどもけいをくへずかやうなるとしおひはてたる人ハ、つミとがゆるさるゝと、あまぎミの給ふ也。

一、「しほたるゝあまをなミぢのしるべにてたづねもミばやはまのま屋まやを」と、あかしのうらたづねミまほしきと、女御よミ給へる也。「御かた、しのび給ハで」とは、あかしのうへ、うちなきてよミ給へる也。

一、「よをすてゝあかしのうらにすむ人も心のやミハはるけしもせじ」、入道にちうだう、よをすてゝ、あきらかなる所にすまんとおぼすとも、子こをおもふ54やミは、はるけはて給ハじと、あかしのうへよミ給へる也。

一、「わかれけるあかつき」とハ、明石をわかれてのほりしこと、ゆめ

のやうなると也。入道の事を、ゆめにもおもひいでぬやうにへだりたるが、くちおしきと也。

一、「かねてハおぼしきハぎしかども、女御たいらかに御子うミ給たる也。」

一、「おとゞも」とハ、源氏も、おとこみ子うミ給へば、御心おちる給へる也。

一、「こなたハかくれのかた」とハ、あかしのうへのすミ給へるたいハ、かくれたるやうなれば、いかめしき御うぶやしなひうちつゞきて、せばき心ちするを、あまぎミの心にハ、かひあるうらとおぼすと也。

一、「ぎしきなきやうなる」とハ、あかしのうへの御かたハ、せはしくて、ぎしきおもふやうならねば、しんでんへわたり給ハんとし給ふ也。

一、「たいのうへも」とハ、紫上も、わたり給たる也。「しろき御さうぞく」と、御産の當日より白装束き給へる也。九ヶ夜に白衣あらため給ふ也。⁽⁵⁵⁾

一、「人のおやめきて」とハ、紫上、まことのおやのやうに、わかミやをぬだき給ふ也。

一、「ミづからかゝる事」とハ、むらさきのうへ、子をうミ給ハねば、ならひ給ハねど、めづらしくぬだきあつかひ給ふ也。「むつかしげにおハする」とは、わかミや、いまだむつきひたしのなかにおハするの心也。

一、「まことのおぼぎミ」とハ、あかしのうへハ、たゞむらさきのうへに、わかミやをまかせ給て、ゆどのなどのあつかひばかりし給ふ也。

一、「春宮のせんじ」とハ、春宮に物申つきなどする女也。

一、「御むかへゆ」とハ、まづゆにおりて、ちごをむかへとりて、ゆをあみせたてまつるを、むかへゆといへる也。あかしのうへ、むかへ

ゆるにおり給ふ也。

一、「うちくゝの事もほのしりたる」とハ、あかしのうへの、くらゐおとりの事ハ、ほのかにたれもしりたるに、かたほなる事あらば、いたハしかるべきを、けだかく、げにかやうなるちぎりことなる人かなど、たれも見おもへる也。⁽⁵⁶⁾

一、「此ほどのぎしき」とハ、此うぶやしなひの、まねびたてんとハ、記者也。

一、「れいのおとゞに」とは、しんでんに、女御わたり給へる。

一、朱雀院の、御かハリにとて、御うぶやしなひ、藏人所より、頭の弁、せんじうけ給ハリて、つかうまつらせける也。ろくのきぬども、中宮の御かたよりも、みかどのせさせ給ふにもまさりていかめしうし給へる也。

一、「おとゞのきミも」とハ、源氏も、此うぶやしなひのぎしきハ、事そがせ給はず、いかめしうし給へる也。「ことそがず」とハ、ことそがずと也。「こちたく」とハ、ことくしくと也。「ミやび」とハ、なさけくしくせさせ給へる也。

一、「めもとまらず」とハ、あまりことくしくしき事ハ、まねぶにかきつくしがたきと記者也。「おとゞのきミも」とは、源氏も、わかミやをぬだき奉り給へる也。

一、「大将の」とハ、夕ぎりの、御子あまたまうけ給たるを、いままでみせぬを、かくらうたき人をえたてまつりたると、わかミやをぬだき給ふ也。⁽⁵⁶⁾

一、「御かたの御心をきて」とハ、明石上の、らうくじさを、ほめぬ人なき也。にくらかにわれこそ女御の御はなれといへるおもむきをもみせずなど、あかしのうへうけばり給ハぬ也。「うけばる」とハ、をしはる心也。

一、「たいのうへ」とハ、むらさきのうへハ、まほならず、明石上とみ

えかハし給て、ゆるしなくおぼしたるけし、なごりなくうちとけ給ふも、いまはわかミやの御とくと見えたると也。

一、「あまがつ」とハ、はうこなど、御てづからむらさきのうへつくり給ふ也。

一、「見たてまつりそめて」とハ、わかミやを、あまぎミ見たてまつりそめて、こひきこゆるにぞ、いのちたへがたきと也。

一、「あかしにも、かゝる御事」とハ、入道も、わかミやむまれ給へるよしきゝて、うれしくおほえければ、いまこそ此よのさかひをはなるべきといひて、ふかき山にいりて、のちハ人に見えしらるまじきとおもふ也。^{56ウ}

一、「おぼつかなき事のこりけると、此女御のみこうミ給はん事をまちて、いまままで山ごもりせざりしといへる也。

一、「これよりくだし給ふ」とハ、京よりくだし給ふ人につたへて、ふミをのぼせたる也。

一、「おもひはなる」とハ、山ごもりするとして、入道ふミかきて、のぼする也。

一、「おなじよの中のうちに」とハ、としごろ、よにながらへて、ゐたれども、いまハながく身をかへたるやうにおもひて、山に入ぬるとふミにかく也。

一、「わかぎミ」とハ、ひめぎミ、春宮にまいる給て、おとこみ子うミ給たるとうけ給はりて、よろこび申侍ると、入道ふミにかける也。

つたなき身の、いまさらによのさかへもいのらず、たゞ六時のつとめにも、あかしのうへの事を心にかけいのりつる。「わがおもとむまれ給はん」とハ、あかしのうへをまうけんとの、「二月のそのよのゆめにみしやう」とハ、「すミの山をみぎのてに」とハ、女はみぎにつかさざれば、あかしのうへをまうけんの心也。^{57オ}

一、「やまひだりみぎより、月日のひかりさしいづる」とハ、月ハ中

宮、日ハ春宮也。あかしのうへのむすめ、中宮になりて、春宮をうミたてまつるべき瑞夢也。

一、「ミづからハ山のしもにかくれて」とハ、入道ハ、よをのがれて、栄花をもむさぼらず、かの中宮・春宮の御とくをかうぶるまじきの心也。

一、「山をひろきうミにうかべをきて」とハ、春宮の御よ、四海をたなごゝろににぎり給ふべきの心也。

一、「ちいさきふねにのりて」とハ、入道、般若のふねにさほさして、生死のうミをはなれて、西方きしにいたるべきにたとふる也。此ゆめさめてのあしたより、なに事につけてか、いかめしき事まちいづべきと、おもひしに、そのころよりはらまれて、明石上うミたる也。

一、「ないけうのかた」とハ、佛法の心をたづぬるにも、ゆめをしんじて、きとく命々あらハしたる事おほかりし也。善恵仙人の五種の寄夢とハ、一には、大海に臥とみ、二には、須弥を枕とす。三には、衆生我身肉にいと見、四には、手に日をとるとみ、五には、手に月をとるとみしを、普光佛にあハせさせたてまつる。普光佛のいはく、大海にふすとハ、なんぢ生死のうミの中をいで、すミの山をめぐらん。衆生身肉にいとミしハ、もろくの衆生のために帰依をなされん。日をとると見しは、智光あまねくてらさん。月をとるとみしハ、清涼に衆生をさいどせんらんゑんなりと、あハせ給ふ也。善恵きゝて、よろこぶ事かぎりなき也。入道のゆめ、これにたがふ事なきと也。

一、「いやしきふところのうちに」とハ、わがかずならぬ身ながら、あかしのうへをいつきかしくづくに、ちからをよバぬ事ありて、はりまのかミに申くだりて、そのよとくにて、あかしのうへはぐゝみたてんとて、はりまのかミなりたると也。^{58オ}

一、「おひのなみに」とハ、としおひて、ミヤこにたちかへらじと、あかしのうらにとしごろすミしほども、あかしのうへをたのむことに思つると也。

一、「そのかへり申」とハ、すみよしに御ぐはんはたしかへり申し給へと也。「かへり申」とハ、ぐわんをはたして、又まうづる事也。

一、「たいらかに時にあひ」と、平安になり給てのよに、すみよしの御やしるをはじめ、御ぐわんはたし給へと也。

一、「此ひとつのおもひ」とハ、ひめぎミ、春宮のみずまうけ給たれ、まぢかくわがねがひかなひたると、入道にふミにかけると也。

一、「にしのかた」とハ、過十萬億、佛土有世界、名為極樂。「九ぼんのかみのぞミ」とハ、上品上生のねがひ、うたがひなしと也。

一、「むかふるはちす」とハ、みだの来迎をまつばかりと也。「水草きよき」引、とづくにハミづ草きよミことしげきミやこのうちハすまずま(58)されり。

一、「ひかりいでんあかつきちかくなりにけりいまぞ見しよのゆめがたりする」とて、月日かきたり。心ハ、春宮の御即位ちかくなりたれば、ミしゆめがたりすると也。月日ハ、をんなぶミにかゝぬなれど、これをわが銚日にし給へとて、かきたると也。

一、「ふちのころもにも」とハ、服衣をも、あかしのうへき給ふなと也。これは、兼恩入無為の心也。父子恩愛をたゝんためゆいごん也。しかれども、尺尊淨飯王の金棺をかき給ひ、目蓮はゝのためうらばんぎやうに盂蘭盆経をまうけ侍れば、明石のうへ、いかでかその恩を報ぜざるべきと也。

一、「わが身ハへんげ物」とハ、ほとけほきさつべはんじきの願力ハ、定力によりて、善悪の業を感じて、かりそめにそのかたちを現する也。変易へんやくも生死しじとハ、これをいふ也。布袋和尚ハ弥勒みろくの變化、寒山十徳ハ文

殊普賢じゆふげんといへるがごとし。入道にうだうも、かならずへんげの人ならんと也。一、「おひぼうしのため」とハ、入道、わがためにハ、くどくをつくり給へと也。

一、「此よのたのしみにそへて」とハ、あまぎミ・あかしのうへ、此よのたのしみにそへて、のちのよわすれ給ふな。「ねがひ侍る所にいたりて」とハ、極樂ごくらくにいたりて、たいめんせんたいめんせんと也。「さばのほかのきしにいたりて」、引、誓到弥陀安養界、還來穢国度人天。はやく此よをさりて、極樂ごくらくにいたりて、われにたいめんせんとおぼせと、入道にうだうふミにかける也。

一、「かのミやしろに」とハ、すみよしにたてたるぐはんふミども、たてまつりたる也。あまぎミのふミにハ、此月の十四日に、山に入たる。かひなき身ハ、くま・おほかミにもせし侍なん。引哥、身をすて、山にいりにしわれなればくまのくらはん事もおもはず。「身をせし」(59)とハ、ほどこし侍ると也。薩埵王子飢虎に身ほどこし給し心也。

一、「そこにハなをおもふやうなる」とハ、あまぎミハ、春宮の御代まぢいで給へ。あきらかなる所にてたいめんあらんとのミかき給たる也。

一、「つかひの大とこに」とハ、あかしよりきたるそうに、あまぎミとひ給也。

一、「たえたるミねに」とハ、人あとたえたる山に、いり給たるといへる也。「なにがしらも」とハ、此大ともふもとまでをくりにまいりたると申也。

一、「いまはとよをそむき」とハ、入道にうだう、かミそしり給し時を、かなしき事のとちめとおもひしかど、なをのこりてかなしく侍しと申也。

一、「みだうにせにう」とハ、きんのこと・びわ、「佛にせにうし給たる」とハ、ほとけにまいらせ給たる也。施入也。ほどこし給ふ也。

一、「でしども六十よ人」とハ、入道してよりつかふ人を弟子といへる也。

一、「此大とこ」とハ、つかひにのぼせたるそうも、わらハにて京より入道のつれて、命をくだりし人の、おひぼうしになりたる也。

一、「わしのミねを」とハ、常在靈鷲山とおもひとり給し佛の、おしだに、わかれハかなしミ給しと也。入道まだいきてあれば、涅槃の心也。

一、「たき木つきにし」、引、入無餘涅槃、如薪盡火滅。ほとけのねはんの時ハ、三明六通の大羅漢だにも、血のなミだをながし苦惱せしかば、ましてあまぎミの入道のことおもひなげき給へるハ、ことハリなると也。

一、「おかたハ、みなミのおとゞに」とハ、明石上ハ、しんでんにおハしけるを、あかしより御せうそこありとて、わがおかたにかへり給たる也。「かよひあひミ給ふ」とハ、あまぎミにも、明石上おもくしく身をもてなし給て、たいめんもかたき也。

一、「あハれなる事」とハ、入道の山ごもりをきつて、あかしのうへわたり給へるに、いみじくかなしげにあまぎミを給へる也。

一、「むかしきしかたの事」とハ、入道のありさま恋しと、明石上おもひいで給ふ折ふし、いきてのよにあひみずして過はてぬるとおぼすに、いとかなしくて、此ゆめがたりを見給ふに、「わが身をあくがらし」とハ、入道のはりまのくにくだり給しハ、此ゆめにたのミをかけてにてありしよと、あかしのうへおもひより給ふ也。「中ごろおもひたよハれし」とハ、源氏に明石上たてまつらんなげきかなしみ給しハ、此ゆめゆへにてありしよと、かつく思ひあハせ給へる也。

一、「あまぎミ、心ちためらひて、「きミの御とくに」とハ、明石上の御とくに、うれしきも又あハれに、いぶせきおもひもすぐれてこそ

侍れとの給ふ也。

一、「ながらへしミやこそすて」とハ、はりまのかミに入道のなり給たるだに、よ人にたがひたる事とおもひしに、いけるよにひきわかれ、又あひみぬやうにならん中とハおもハざりし、のちのよさへおなじはちす命ををかけてちざりしに、おもひかぬ事いできて、そむきしミやこにたちかへり、かひある御ことを見たてまつる物から、かたつかたにハ、入道の事をおもひなげくに、つるにあひみず、かなりぬるとなき給ふ也。

(一)、「よにへし時だに」とハ、入道し給ハざりし時だに、もてひがむるやうなりつれど、わかきどちをのくたのミならひて、又なくちざりきてふかくこそたのミ侍つれ。きくほどハちかきやうにてあひ見ざるらんと、うちなき給ふ。

一、「御かたもいミじくなきて」とハ、あかしの上も、人にすぐれんゆくさきの事もおぼえず。入道のありさまあハれに、おぼつかなくてやミなんのミこそくちおしけれ。「よろづの事、さるべき人の御ため」とハ、源氏の御ための、いのりを入道し給たるところおぼゆれど、さて入道の山にあとたえてこもり給ひなば、さだめなきよな命をば、やがてきえ給ひなば、かひなくなんといひつ、あかし給ふつ。

一、「きのふも、おとゞのきミの」とハ、源氏の、しんでんにありと見をき給しに、かろくしくはひかくれたるやうならん。かくそひたてまつるひめぎミの御ため、心にまかせて身もてなしにくきとて、あかつきにかへり給ふ也。わかみやハ、いかゞおハしますと、あまぎミの給ふ也。いままたてまつり給なんと、あかしのうへの給ふ也。「女御のきミも」とハ、ひめぎミも、あまぎミおぼしいでの給ふ也。源氏のことのつゐでにおもふやうならんよまで、ゆゝしきかねごとなれど、あまぎミながらへ給へかしの給ふと、あかしのうへかたりに給へば、又うちゑミて、あまぎミさまぐためしなきすぐせとて

よろこび給ふ也。

一、「此ふばこハ」とは、あかしよりのふもたせてまうのぼり給ふ也。

一、「ミヤより、とくまいり給ふべきよし」とハ、春宮より、女御まいり給へとあるを、かくめづらしく、わかミヤをいかに心もとなくおぼすらんと、むらさきのうへの給て、わかミヤまいらせたてまつらんとの給ふ也。

一、「ミやす所ハ、御いとまの」とハ、御子いでき給へば、やがてミヤす所と申也。いとまの心やすからぬ、しはしは里にあらんと、ミヤす所おぼす也。

一、「ほどなき御身に」とは、まだいとわかおハしまして、御子うミ給へば、すこしおもやせほそりて、なまめかしくみえ給ふ也。

一、「ためらひがたく」とは、御心ちまたたすけがたくおハするほど、つくるひてこそと、明石上などハの給へど、源氏ハ、かやうにおもやせて見えたてまつらんこそ、あハれならめとの給ふ。

一、「たいの御かたなどのわたり給ぬる」とハ、むらさきのうへ、わがかたへわたり給たるに、あかしのうへ、ミやす所のおまへにまいり給て、あかしよりの御ふミ見せ奉り給ふ。「おもふさまにかなひ」とハ、春宮も、御即位ごすくいあらんまでハ、かくしをくべけれど、よの中さだめなければときこえ給ふ也。

一、「御心おほしかずまへざらん」とハ、ミやす所も、きさきになり給はぬさきに、わが身、ともかくもやならんと、「かならずいまハきハ」とは、わがなくならんを、ミやす所御らんずべきにあらねば、うつし心侍るほどに、はかなき事も申をくべきと、あかしのうへの給ふ也。「うつし心」ハ、うつし心也。本心ほんしんうせぬ時といふ心也。「あやしきあとなれど」ハ、いやしき入道にゅうだうの手跡てしせきといふ心也。此ぐわんぶミハ、ちかきミづしにをかせ給て、此うちの事どもせさせ給へとて、

ふばこたてまつり給ふ也。うとき人にミせ給ふなと申給ふ也。

一、「かばかり見奉りをき」とハ、かく御子ごこまうけ給へると見奉りをきければ、ミづからもよをそむかんと申給ふ也。

一、「たいのうへの御心」とハ、むらさきのうへの御事、をろかにおぼさるゝなと也。「身にハこよなく」とハ、われよりハ紫上むらさかよにながくひさしくおハし給ませとおもひ侍るとの給ふ也。御身にそひきこえせんも、つゝましき身のほどなれば、むらさきのうへにゆづりそめ侍りしを、かやうにいま又そひたてまつらんともおもハざりしをと、あかしのうへの給ふ也。

一、「よのつねに」とハ、よの人のうハなりの中のやうしたしきことハなくてあらんかとおもひつれば、むらさきのうへかくうちとけ給へば、きしかたゆくさき、うしろやすくおもひなり侍ると、きこえ給ふ也。ミやす所ハ、なミだぐミてきゝおハする也。

一、「かくむつまじかるべき」とハ、ミやす所とあかしのうへむつまじかるべきかなれど、わりなく物づゝみし給て、ミやす所にはゞかりをきもてなし給ふ也。

一、「此ふミの」とハ、入道のことば、こハくしく、みちのくにがミにて、かうにはふかくたきしめて、かき給へり。ミやす所、あハれと見給て、御ひたいがミぬれゆく御そばめ、あてになまめかしき也。「なまめかしき」ハ、うつくしき也。（命）

一、「院ハ、ひめミヤの御かたに」とハ、源氏ハ、女三のミヤの御かたに、おハしけるを、中のミさうじよりミやす所の御かたにわたり給へる也。

一、「えしもひきかくさで」とハ、あかしよりのふミ、ひきかくさで、御木丁ごまぢやうひきよせて、あかしのうへ、すこしかくれてゐ給へる也。

一、「わかミヤハをどろひ給へりやと、源氏の給へば、ミやす所ハいらへ給ハねば、明石上、たいにわたし給へときこえ給ふ也。

一、「あなたに此ミヤをりやうじ給へる」とハ、むらさきのうへの御かたにのミをきたてまつり給て、「人やりならずきぬもぬらしがちに」とハ、むらさきのうへのきぬも、わかミヤのぬらし給ふと、源氏の給ふ也。「こなたにわたり給て」とハ、しんでんにむらさきのうへわたりてこそ、見たてまつり給ふべけれど給ふ也。

一、いとうたて、おもひぐまなき御事かな。むらさきのうへの御おもひを⁶⁴あさくなの給ひなしそ。「女にて」とハ、ひめミヤにて、おハしますとも、むらさきのうへの御かたお⁷し給ハんにこそよく侍らめ。ましおとこみやハ、「かぎりなし」とハ、みかどの御子⁶³とても、おとこ心やすくおほえ給ふを、たハぶれにも、へだてがましくなの給ハせそと、明石上^{あかし}の給ふ也。「さかしら」とハ、かしこだてになの給⁶⁵ふそと也。

一、御中どもにまかせて、われハわかミヤを見はなち奉るべきかと、源氏の給ふ也。「御中ども」とハ、むらさきのうへ、明石上^{あかし}にまかせてと也。

一、「へだてゝいまハたれもく」とハ、紫上^{むらさき}もあかしのうへも、われをへだてゝ、さかしらなどの給ふこそと、源氏たハぶれの給ふ也。一、「はひかくれて」とハ、明石上、木丁^{きぢやう}にかくれる給たるを、源氏うらみ給ふ也。

一、「いひおとし」とハ、むらさきのうへに、へだて心なおほしそと、われをあかしのうへおとして、なの給ひそと也。「み木丁^{きぢやう}ひきやり」とハ、あかし⁶⁴のうへの木丁^{きぢやう}を、源氏ひきのけ給へば、はしらによりかゝりて、心はづかしげなるさましてゐ給へる也。「ありつるはこも」とハ、明石^{あかし}よりのふばこも、かくさんにさまあしければ、さておハす。「さて」とハ、そのまゝ、おハす也。

一、なぞのはこそ。ふかきけさう人の、ながうたよみてふんじこめたる心ちすと、かのふばこをげんじの給へば、あなうたて、いましめ

かしくなりかへらせ給へる御心ならひ、きゝしらぬことゞもこそ、時ゝいでくれとて、ほゝゑミながら、あかしのうへ、物あハれなるけしきどもしるければ、あやしと源氏うちかたぶき給へる也。

一、「わづらハしくて」とハ、源氏のあやしがり給ふを、明石上わづらハしくて、明石のいはより、まられるくハんじゆ、又まだしき御ぐわんの侍りける、源氏の御心にもしらせ奉^{たてまつ}れと侍ると、あかしの上申給ふ也。

一、げにあハれなるべきありさまぞと、入道の事をおぼしやる。いかに⁶⁶入道^{にうだう}をこなひましてすミにたらんと、こゝらのつミもことなかくるくなるらんと給ふ也。「こゝら」ハ、おほくの、つミかろからんと也。

一、「ざえあり」とは、才覚^{さいかく}さかしき人としてみるにも、此よにそみてにこりふかきを、入道のやうに心すミたるハまれならんと也。

一、「かしこきかたこそあれ」とハ、才覚^{さいかく}かしこき人も、入道の心によぶまじきこそおほけれと、源氏の給ふ也。いたりふかく、けしきもあらず。「したの心は、みなあらぬよにかよひて」とハ、ほとけのよに入道^{にうだう}の心かよひてみえたと也。

一、「ましていまは」とハ、心ぐるしくおもハれし明石上^{あかし}などはなれてこそ給ふらん。かやすき身ならば、ゆきてあハまほしきとの給ふ也。

一、いま侍りし所にもあらず、鳥のねきこえぬ山にすミ給ふと⁶⁷きゝ侍ると、あかしの上の給ふ也。さらば、そのゆいごんなんなり。せうそこハかよハし給やと、源氏の給ふ也。「おや子^この中よりも、又さるさま」とハ、夫婦^{ふうふ}の中のかなしミを、いかにあまきミおぼすらんとの給ふ也。「とりのねきこえぬ」、引哥、とぶとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を人ハしらなん。

一、「よのありさまを、とかくおもひしるに、あやししく入道を恋しくおもふと、源氏の給ふ也。」ふかきちぎりある中」とハ、あまぎみのさぞおもひ給ふらんなどの給ふつゝに、此ゆめがたりをおほしあはする事もやと、いとあやしきほんじとかいふやうなるとて、とりいで給ふ也。「ほんじ」ハ、てんぢくの文字也。入道の手跡のこハくしきを、あかしのう、かくの給ふ也。「いまハとてわかれ」とハ、京へのぼる時、かなしきはつくしたると思ひしかど、なをあれハ残れると也。^(66オ)

一、「かしこく、ほれぐしからずこそ」とハ、入道ほれぐしからず、手なども、何事も、わざというそくにしつべき人の、此よにふるかたの心をきてのすくなかりけると、源氏の給ふ也。

一、「かのせんぞおとゞ」とハ、引、忠文式部卿、将門征伐の大將軍たりけるに、勲賞のさだめありける時、清慎公賞のうたがハしきをば、をこなハざれと申されけるに、おとゞの右丞相刑のうたがハしきをばおこなハざれ、賞のうたがハしきをこなへとこそ申すなれと、申されけれども、つゝに其沙汰もなかりければ、式部卿家にかへり給て思ひ死し給けり。やがて悪霊となりて、たゞり給しゆへに、清慎公の子孫ハすゑなくなれると也。入道を清慎公の子孫にたとへてすゑなきやうなれど、かのをこなひのちからにて、あかし⁶⁶のうへのすゑめでたくなれると、源氏の給ふ也。「女子のかたに」とハ、明石上の、かくめでたきさいはひハ、入道のをこなひのしるしと也。

一、「ゆめのわたり」とハ、入道のゆめがたりを、めとゞめて、源氏ミ給ふ也。

一、「たかき心ざし」とハ、あかしのうへミやづかへにいだしたてんなど入道いひしを、人もとがめしハ、此ゆめに心をかけたるならんと、源氏の給ふ也。

一、「われながらも、さるまじき」とハ、明石上にちぎり給しことを、あるまじきふるまひと思ひつれど、ひめぎみのむまれ給し時に、ちぎりふかく思ひしりにしなどの給ふ也。めのまへにみえざりし事なれば、おぼつかなくこそ思ひつれと、源氏の給ふ也。

一、かゝるたのミありて、あかしのうへをわれにゆづらんとハ、此ゆめにたのミかけてのぞミしよとおぼす也。「此人ひとりのため」とハ、入道のために、われもすま・あかしにくだりしよと、源氏おぼす也。^(67オ)

一、「いかなる願をか心に」とハ、入道いかなる大願をたて、ぐはんぶミかとおぼして、心のうちに源氏おがミてとり給ふ也。これハ又ぐしてたてまつるべき物あり。いま又、きこえしらせ侍らんと、ミヤす所にハきこえ給ふ也。「いまハかくいにしへの事を」とハ、あかしのうへをまことのハゞミとたづねしり給ふとも、むらさきのうへの御心はへを、ろかにおぼしなすなと、ミヤす所に源氏の給ふ也。

一、「えさらぬむつびよりも」とハ、あひはなるまじきおやはらからなどよりも、「よこさまの人のなげのあハれをも」とハ、まゝはゞなどのおほかたのあハれミをもかくるハ、おぼろけの眞実にてハあらじとおぼせと、源氏の給ふ也。「おぼろけ」とハ、せうくならぬ心ざしとおぼせと也。

一、「こゝになどさぶらひなれ」とハ、あかしのうへ、女御にそひおハしますをみるくも、はじめの心ざしかハラず、むらさきのうへ、ふかく思ひ給へると也。^(67ウ)

一、「さこそうハべははゞみ」とハ、うへばかりにまゝはゞねんごろにはぐゝみたてすれど、した心ハ眞実すくなからんをも、むすめハ見しらぬやうにて、まことによくはゞゝまるゝよとおもハゞ、まゝ母の心ををろかあるまじきと也。「らうくじき」とハ、勞功いりて、まゝはゞの心をたどりしらんハ、かしこきやうなるべけれど、わが

ためした心ゆがミたらんまゝ母をさもおもひよらぬやうに、むすめ
 うちのむ心みせば、うらなかつたのむけるよとひきかへし、かゝる
 人をにくみてハ、つミえがましからんと、まゝはゝおもひもなをす
 べきと、源氏、女御にかたりきかたてまつり給ふ也。

一、「おほろけのむかしのよのあだならぬ」とハ、せうくならず真実
 ありしむかしの人ハ、まゝこのたがへども、まゝはゝのつミなきや
 うにとりなせば、をのづから、もてなをしゆくためしもあるべきと、
 源氏の給ふ也。

(一)、「ひとりくつミなき」とハ、まゝはゝか、まゝ子か、ひとり心だ
 てよければ、そゝれにてもてなをすと也。さしもあるまじきこと
 に、くせをつけ、あひぎやうなく人をもてはなれなば、うちとけに
 くゝおもはれんと也。

一、「おもひぐまなき」とハ、人のふかくおもふ心をあさくなすといへる
 心也。

一、「ゆへよし」とハ、「ゆへ」ハ、種姓、しゆじやう「よし」ハ、なき也。さま
 くゝになさけくらゐなどくちおしからぬ心ばせ人によりてあるべき
 と、源氏の給ふ也。

一、「みなをのく」とハ、人をえらびてみるに、とり所なきハあるま
 じく、えたるしわざもあるべけれど、わがうしろミと、まめくし
 くだのまんにはありがたきわざになんと、源氏の給ふ也。

一、「まことに心のくせなくよき」とハ、「たいのを」とハ、むらさき
 のうへをこそ、おいらかなる人といふべけれど、源氏の給ふ也。

「おいらか」、ぢちにまめやかなる心也。

一、「あまりひたけ」とハ、喧嘩がましき人は、たのもしげなきと
 也。

一、「かたへの人ハ」とは、花ちる里すゑつむ花の事などハ、をしは
 かるゝとつこ。

一、「そこにこそすこし物の心えて物し給ふ」とハ、明石上こそ心えよ
 ければ、むらさきのうへとむつびかハして、ミヤす所の御うしろミ
 したてまつり給へと、源氏の給ふ也。

一、「の給ハせねど」ハ、源氏の、かくの給ハねど、ありがたきむら
 さきのうへの御けしきを見たてまつれば、あけくれのことぐさにも
 めざましとむらさきのうへおぼしゆるさゞらんハ、たちまじハリ
 たてまつることもあるまじけれども、御ゆるしあればこそと、明石
 上申給ふ也。かたハラいたきまでむらさきのうへかすまへさせ給へ
 ば、かへりてまばゆくとの給ふ。「まばゆき」は、はづかしき也。「か
 ずならぬ身の、きえぬハ」とハ、ながらへぬるハ、よのきこえもミ
 やす所の御ため心ぐるしき、明石上の給ふ也。

一、「つミなきさまにもてかくされ」とハ、むらさきのうへにかすなら
 ぬ身もてかくされたてまつりてと、明石上の給ふ也。

一、「その御ために、なにばかり」とハ、明石上のためにてなし、たゞ
 ミやす所の御ありさまを、むらさきの上、うちそひてミたてまつり
 給ハぬに、ゆづり給ふにこそあれ。それも又明石上とりて、けちゑ
 んにみえ給はぬに、よろづなだらかにのめにめやきと、源氏の給
 ふ也。「けちゑん」ハ、いちじるき也。「なのめ」ハ、大かたにめや
 すきと也。

一、はかなき事にも、物の心ゑずひがごとがましき人ハ、たちまじる
 につけても、人のためからき也。なをし所なく明石上もおハしませ
 ば、心やすく、げんじの給ふにつけても、さりや、よくこそひげ
 しにけれど、明石のうへおぼす也。「さりや」とハ、さありや也。

一、「いとやんごとなき御心ざし」とハ、むらさきの上に源氏のミ心ざ
 しまさり、「かくしもぐしたる人ハ」とは、かくなにもぐそくした
 る人ハ、ありがたからんと、女御もの給へる也。「ミヤの御かた」と
 ハ、女三のミヤハ、うハべばかりの御命がしづきと、「わたり給ふ

事」とハ、よるく源氏わたり給ふ事、むらさきのうへにはなのめならざるハ、かたじけなきわざと也。「なのめならざる」ハ、大かたならざる也。「おなじすぢに」とハ、紫上と女三のミヤとにおなじごとく、源氏よがれなきやうに見え給へど、いまひときハむらさきの上に御心ざし給ざるハ、女三のミヤのため心ぐるしきと、女御しりうごとし給ふ也。「しりうごと」ハ、かげごと、の給ふ也。

一、「わがすくせハ」とハ、明石上、わがすくせハ、心たけくおぼす也。「やんごとなきだに」とハ、女三のミヤだに、おぼすまゝにハあらざりけるに、たちまじるべきおぼえにもあらぬに、紫上にまじハり奉るを、おもへばすべてうらめしきふしもなし。たゞ入道のたえこもる給たる山ずミ、あはれにおもひやるのミかなしきと也。

一、「あまぎもまたゞ、ふくちのそのにたねまきてと、やうなるひととを」命とハ、入道のさばのほかのきしにいたりてたいめんせんとの給しことをたのもしくおぼすと也。「ふくちその」とハ、福分の地にたねをまきてまつがごとくと也。のちのよ思ひやりてながめ給ふと也。

一、「大将のきミハ」とは、夕ぎりハ、女三のミヤの御事思ひをよバぬにあらねば、めにちかくおハしますを、たゞにもおぼえず、さりぬべきおりくまいり給て、御けハひ見き給ふに、わかくおほどき給へるひとすぢにて、うハバハ源氏ためしなきまでかしづき給へど、おさくけざやかに物ふかくハみえずとおぼす也。「おさく」ハ、長じて、やんごとなくハみえ給ハぬ也。

一、女ばうなどもおとなしきハすくなく、わかやかなるかたち人のミなるとみえたる也。「かたち人」とハ、美人をいふ也。

一、物おもひなげなる御かたとはいひながら、何事ものどや心しづめたる人ハ、心のうちにはおもふ事ありもやすらん、又まことに心ちゆきとゞこほり命なき人にまじハれば、おなじけハひにて、たゞ

明くれハ、いはけたるありさまなど、源氏ハめにつかずミ給ふを、ひとつさまよの中をおほさぬ心にて、かゝるわらハあそびのやうなるをも、さこそあらまほしからめとゆるして、いましめとゞのハ給ハず。

一、「さうじミの御ありさま」とハ、女三のミヤばかりを、いとよくをしへ給へる也。すこしもてつておハします也。かやうの事を、夕ぎりハ、むらさきのうへの御もてなしを、げにありがたき御よういとおほしあハする也。「よいい」ハ、心もち也。

一、「としへぬれど」ハ、紫上としへておハしませど、ともかくも御ふるまひ・たゞずまひなど、よにもりいでゝもきこえず、しづやかに、心うつくしう、人もけたず、身をもやんごとなく心にくゝもてなしそへ給ふ事と、見しおもかげもわすれがたくおほしいづる也。

一、「わが北方」とは、雲のかりハ、あはれとおぼすかたこそふかけれ。「すぐれたるらうく、じさなども」命とハ、労働などのいりたる心ばへもなく、「をだしき物に」とハ、をだやかにめなるゝまゝに、心ゆるして見給ふ也。「なをかくさまぐゝにつどひ」とハ、源氏のあまたのきたのかたを、夕ぎりミ給ふまゝに、われもあまたつどへてもミまほしくおぼすにも、此女三のミヤハ、人づてならず、朱雀院のの給し物をと、人の御ほどをもおもひやり給へる也。

一、「とりわきたる御けしきにも」とハ、源氏の御心ざしとりわきてもあらず、人めのかざりばかりと、夕ぎり見たてまつり給へる也。

一、わざとおほけなき心ハあらねど、女三のミヤのかたち見奉るおりありなんやと、ゆかしくハおほしける也。

一、「右衛門のかんのきミも」とハ、かしハ木も、朱雀院につねにしたしくさぶらひなれて、此女三のミヤを朱雀院のかしづき給し御心など、見たてまつりきて、さまぐゝの御さだめありしころほひきこえより、命朱雀院もめざましからずおほしの給たるときゝし

を、かく源氏におハしましたるハ、くちおしくおぼして、猶そのお
りよりかたらひつきたる女ばうのたよりに、きつたふるをなぐさ
めにてすぐすぞはかなかりける。

一、「たいのうへの御けハひ」とハ、むらさきのうへのけハひに、をさ
れてなんと、女三のミヤの御事をよ人もまねびつたふるに、かたじな
くとも、わがちぎりたてまつらば、さる物はおもハせ奉らざらまし
と、かしハ木おほす也。

一、「たぐひなき御身」とハ、女三のミヤになれ奉るべき身にてこそあ
らざらめと、つねに此小侍従といふ御ちぬしをいひはげまして、
よのなかさだめなきをとの給ふ也。「ちぬし」と、めのとの子をいふ
也。

(一)、「おとゞのきミも、もとよりほい」とハ、源氏も、むかしよりよを
のがれんのほいふかくおハしませば、入道もし給ひつべし。さやう
ならば、女三のミヤひとりずみにこそなり給ハめなど、たゆミなく
かしハ木小侍従にたゞすの給ひありき給ふ也。「やよひばかりの」と
ハ、三月、そもうららかなるに、六条院に、兵部卿のミヤ、衛門
のかミなどまいり給へり。源氏いで給て、しづかなるすまひ、つれ
くなるに、おほやけわたくしにあそぶべきことなしなどの給て、
けさ、大将の物しつるハと、夕ぎりを源氏たづね給ふ也。

一、さうくしく、ねぶたかりつるを、こゆミいさせてみるべきとの
給ふ也。

一、大将ハ、うしとらのまちに、人々あまたして、まりあそバしてお
ハしますときこしめして、みだりがハしきことなれど、めさめてお
かしの給ひて、こなたにと御せうそこあれば、わかきんだちおほ
かりけり。これかれ侍り。こなたへとの給て、「しんでんのひんがし
おもて、きりつばハわかみやぐして」とハ、女御ハうちまいり給
へば、こなたハかくろへたるかたとて、よしあるかゝりのほほどにた

ちいで給へる也。「おほきおほととのきんだち」とハ、内府の御そく
たち、頭の弁、大夫のきミ、みなかしハ木のはらからのきんきんだ
ち也。「すぐしたるも」とハ、としよりハ官位くわんいすぎたるも、「さまく
に人よりまさりて」とハ、まり上ずなると也。「くれかゝるに、かぜ
ふかず」とハ、まりハ、風のあらければ、そばへちりてけらぬと也。
一、「おとゞ、弁官も」とハ、源氏、おもくしき弁官べんくわんさへたちまじ
り給ふに、かんだちめなりとも、わかき衛ゑふづかさハ、などかみだ
れざらんとの給ふ。衛門のかミを衛ゑふづかさといへる也。「かばかり
のよハひにて」とハ、としよりてハ、まりにあハざれば、見すぐし
けるがくちをしきと、源氏の給ふ也。

一、「さるハいときやうくなり」とハ、かるくしきわざと也。軽く
也。

一、「大将もかんのきミも」とハ、夕ぎりかしハ木、おり給へる也。し
づかならぬみだれあそびなれど、所がら人がらにもてはやさるゝと
也。

一、「わづかなるもえぎのかげ」、あをばもえぎまじりたるこかげ也。

一、「よきあしきげぢめ」とハ、上ずへたのきハをいどミ給ふ也。あら
そひ也。たゞす

一、「ゑもんのかミの」とハ、かしハ木の、かりそめにたちいで給へる
あしもとにならぶ人なかりけり。かたちよき人の、よいいことにし
てさすがにみだりがハしきありさま、おかしくミゆ。花のちるべき
もわすれて心にいれたるを、源も兵部卿のミヤも、かうらんにいで、
ミ給ふ也。まりハうへより見おろさぬ物なれど、人によりて也。

一、「らうある心ばへ」とハ、労働のいりたる心ばへどもみえたる也。

一、「かうぶりのひたい」とハ、かぶりもくつるぎゆがめるやうにみだ
れて、け給ふ也。

一、「大将のきミも」とは、夕ぎりも、御くらゐこそたかけれど、わか

くおハすれば、みだれたる御さまかろくしくもみえぬと也。「さくらなをし」庭の花にえんある色と也。「さしぬきのすそ、ふくみて」とハ、なへばミたるすそを、ひきあげ給へる。かろくしくも見えぬと也。

一、「しほれたるえだををしおりて」とハ、資雅卿ハかゝりの花をおりて、こし（はら）にさして、けたるよしミゆ。これハ、花のえだおりても給へるにや。みはしの中のしなほのほどに、夕ぎり給へる也。

一、「かんのきみつぎて」とハ、かしハ木も、「桜をよきて」、引哥、ふくかぜも心しあらばこの春ハさくらをよきてちらさざらん、とて、女三のミやおまへをしりめに、かしハ木ミやり給ふ也。「れいのおさまらぬ」とハ、女三の宮の女房たちあらハにならびたるさま也。

一、「春のたむけのぬさぶくろ」とハ、色くのかミにてしたるぬさを、ふくろにいれて、手向にするににたるやうなる。ミすのすきかげの人々のきぬのそでぐちこぼれいでたる也。「人げちかくよづきて」とハ、おとこにはゞから物（もの）給ふと、かしハ木おほざる也。

一、「からねこの」とハ、うつくしきねこの子の、おほきなるねこよりをハれて、はしり出る。つなにてみすひきあげられたる也。（たの）

一、「そよく」とハ、きぬのをとなひ、かしがましきほどそよぎたる也。ねこハつなながくつきたるを、ミすにひきたるを、とりなをす人もなき也。

一、「うちぎすがたの人あり」とハ、女三のミやたちいで給たる也。

一、「はしよりにしの二のま」とハ、はしよりにしミやれば、二のまにあたるひんがしのはしらのそばなれば、まぎれなく女三のミやならんと、かしハ木見奉りたる也。「すぎくあまた」とハ、次第（たづ）くうへハみじかくかさなりたる御ぞのつまく、花やかに、さうしをつまをみるやうなると、かしハ木心也。さくらのほそなが、おもてしろく、うらあかむらさき也。御ぐしハ、いとをよりかけたるや

うなると也。かミのすそ、七八寸ばかり、御ぞにあまりたる也。「さやかなる」ハ、ちいさやかなる也。

一、「まりに身をなぐる」とハ、身すてゝひきよくをける也。花のちるをもおしまず、まりに心いれたるをみると、人々そばあたり（はら）を、ふともみつけぬ也。ねこのいたくなけば、「ミかへり給へる」女三のミやみかへり給へるおもゝち、おひらかにみえたる也。「おひらかに」とハ、ねをびれたるかほのやうなると也。

一、「大将いとかたハラいたし」とハ、夕ぎり、みすのあがりたる、はひよりてひきなをさんもかろくしくとおぼして、心をえさせて、うちハぶき給へるにぞ、やをら女三のミやひきいり給へる。「わが心ちにも」とハ、夕ぎり、あかぬ心ちし給て、いますこし見まほしくおぼしけれど、ねこのつなゆるしつれば、心にもあらずうちなかれ給ふ也。

一、「さばかり心にしめたる」とハ、かねてミたてまつりたきとおぼしつるかしハ木ハ、むねふたがりて、たればかりならん、こゝらの女房たちの中にしるきうちぎすがたよりも、すぐれ給たるハ、まぎるべきかたなく、女三のミやにておハしますべきとおもひ給へる也。うちぎすがたあまたありつれども、（たの）それハみな官女とされたると、かしハ木の心也。「こゝら」ハ、おほくと也。

一、「さらぬがほにもてなし」とハ、かしハ木、ミぬやうにもてなし給たれど、まさにめとゞめじやと、夕ぎりをしはかり給ふ也。「まさに」とハ、まさしく、かしハぎ女三（たづ）にめとゞめてみずハあるまじきと、夕ぎりおぼす也。

一、「ねこをまねきよせて」とハ、かしハ木、かのねこをなぐめにとて、いだきてみ給へる也。「なつかしくおもひよそへらるゝ」とハ、ねこのかうバしきなど、女三の宮の手ふれ給ひつらんと思ひよそへらるゝぞ、すぎくしきと、わが心ながらおもハるゝと也。

一、「おとゞ御らんじて」とハ、源氏、かしハ木のかた見をこせて、かんだちめの御座ぎいとかるくしとて、こなたにこそとて、「たいのみなミおもてにいり給へれば」とハ、たいのみなミおもて、ひがしたひがしいのみなミのひさし也。むらさきのうへのすミ給へるかた也。「すのわらうだめして」とハ、まりえんぎむらさきなり。わざとなく、「つばるもちい」、まりの時の食物也。なし、かうじやうの物ども、とりあへぬあるじまうけと也。「そほれとりくふ」とハ、されてとりくまにまいりたる也。「さるべきから物」とハ、からびたるさかなと也。

一、「衛門のかミハ、思ひしめりて」とハ、かしハ木ハ、うちしめりて、やゝもすれば、花の木をながめ給ふを、大将ハ心しりに、ねこのつなひきしみすのつまを、かしハ木思ひいで給ふことやあらんと思ひ給ふ。はしぢかになりつるありさまを、かるくしとおもふらんと、夕ぎりおほす也。「いでや、こなたの」とは、むらさきのうへの御かたの、さやうにはしぢかきいでるなどあるまじき物とおもふに、かゝればこそ、よのおほえよりハ、うちくのげんじのげんじの女三のミやのもてなしぬるきやうにあれば、おもひあハせ給へる也。「うちとのよういおほからず」とハ、女三のミやの御かたハ、うちとのようじんのなくもいはけなきハ、らうたきやうなれど、うしろめたく、おもひおとし給ふ也。へろオ

一、「宰相ハ」とは、かしハ木ハ、よろづのつミをも、おさくたどらたどらず、おほえず物のひまより、ほのかにそれと見たてまつりつるも、むかしよりの心ざしのしるしに、あひミたてまつるべきこともやと、うれしき心ちし給ふ也。かしハ木、此まきにて、宰相をかけ給たるとミゆ。「おさく」とハ、粗ぼといへる心也。又、さらにくといへることといへりともいへり。

一、「院ハ、むかし物語」とハ、源氏ハ、物がたりしいで給て、内府の、よろづの事あらそひ給しに、まりなんをよばざりし。はかなき

事ハつたへあるまじけれど、物のすぢハ、こよなかりける。かしハ木のまり、いとめもをよばず、かしこかりけるとの給へば、うちほゝゑミて、はかしくしかかたにハぬるく侍る家いへのかぜの、さもふきつたへ侍らんハ、のちのよのため、ことなることなくこそ侍るべけれど、かしハ木申給ふ也。

一、いかでか。なに事も人にことならんしわざハ、そのけぢめを、しるしへろウつたふべきなり。家のつたへにかきとゞめいれたらんこそ、けうあらめなど、たハぶれ給ふ源氏の御さま、きよなるを見奉るに、かゝる人にならひて、女三の宮いかばかりのことにかわれにハ心うつし給はん、なに事につけて、あハれミゆるし給ふばかりなびかしきこゆべきと、おもふに、いとこよなく女三のミやの御あたりはるかなる身のほど思ひしらるれば、むねふたがりてかしハ木まかで給へる也。

一、大将のきミ、ひとつくるまにて、此ごろのつれづくにハ、此院にまいりてまぎらハすべきなり。けふのやうならんいとまの日、花のおりすぐさずまいれと、源氏の給へるを、春おしミがてら、月のうちに、こゆミもたせてまいり給へと、夕ぎりにかしハ木ちぎり給ふ也。

一、「をのくわかるほど」とハ、夕ぎり・かしハ木物がたりして、「ミやの御こと」とハ、女三のミやの御事、かしハ木いハまほしさに、院ハ、なをくむらさきのうへおののかたにのミおハしますずらん、中の御おほえことならんかし。女三のミやいかにおほすらん。朱雀院のならばなくならハし給へるに、さしも源氏の御真実なくてハくつしておハしますらんこそ心ぐるしけれど、あひなくいへば、「あひなく」と、あぢきなく也。たいくしき事、いかでかさハあらん。「こなたハ、さまかハリ」とハ、むらさきのうへハ、おさなくよりおゝしたて給へるにむつまじきなり。女三のミやこそ朱雀院

の御おぼえにてやんごとなくおもひ給へと、夕ぎりかたり給へば、

「いで、あなかま、給へ」とハ、あな、かしましきことな給ひそ、みなきゝて侍り。いとをしげなる折くあるをや。をしなべたらぬ人なるを、ありがたきわざなり。いとをしがりて、かしハ木、

一、「いかなれば花にこづたふうぐひすのさくらをわきてねぐらとハせぬ」、源氏の好色の人のいかなれば、女三のミヤのさくら花の心ちするには、かれくにおハしますらんと也。「春のとりの」とハ、うぐひすの、さくらかきひとつによるとまらぬ心ちしてあやしきと、くちずさび給へる也。

一、「あなあぢきなの物あつかひ」とハ、かしハ木、女三のミヤのあつかひあぢきなしと、夕ぎり、さればよ、女三のミヤに心かくりけるとおぼして、

一、「ミ山木にねぐらさだむるはこどりもいかでか花の色にあくべき」、むらさきのうへをミ山木やまぎよそへて、むらさきのうへやまぎねぐらと源氏さだめ給ても、花なる女三のミヤにいかであき給ハんと也。

一、わりなき事ひたおもむきにむらさきのうへばかりにハ、源氏なにか心ざしふかくハあらんと、夕ぎりいらへ給ふ。「ひたおもむき」と、一向いっぺんにといへる心也。「ことにいはせず」とハ、かしハ木に女三のミヤのいはせ給ハぬ也。

一、「をのくわかれぬ」とハ、夕ぎりかしハ木ゆきわかれ給へる也。

一、「かむのきミは」とハ、かしハ木ハ、内府のひんがしのたいに、ひとりずミ給て、おもふ心ありて、としごろかゝるすまひするに、さうくしく心ほそきほそおりくあれど、わが身さばかりにて、なかおおもふ事かなハざらんと、心おごりするに、此夕よりくしいたく、物おもハしくて、いかならんおりに、さばかりにても、ほのかにミたてまつらんとおぼす也。「さばかり」とハ、ねこのつなひきたるみすのひまほどにても、いかで女三のミヤみたてまつらんと也。

「くしいたく」とハ、苦痛也。くしいたきとよむ。

一、ともかきともまぎれたるハ、しないやしき人ならばこそ、物いミ、かたがへなどのうつろひもかるくしくあらば、さやうのまぎれをもしのびよるべけれ、などおもひやるかたなく、おぼさるゝ也。

一、「ふかきまどのうちに」とハ、女三のミヤ、おくふかくこもりおハする人にハ、なにはかりのことにつけてかハ、かくふかきおもひある心をだにしらせたてまつるべきと、むねいたくおぼしわびて、小侍従がり、ふミやり給ふ。「がり」とハ、小侍従がやどにといへる心也。里をも、がりといへる也。(87)

一、ひといハかせにさそハれて、みかきのはらをわけいり侍しに、いと、いかに見おとし給けん。その夕より、みだり心ちかきくらし、あやなくけふハながめくらし侍るなどかきて、「みかきのはら」とハ、六条院のうちにハまいりたれども、侍従にたいめんせねばと也。

「いかに見おとし」とハ、まりのみだりがハしかりつれば、かろくしと見給ひつらんと也。「あやなくけふハ」、引哥、みずもあらずみもせぬ人の恋しくハあやなくけふやながめくらさん。女三のミヤを、みすのひまより、みずもあらずと也。すこしみたるの心也。

一、「よそにみておらぬなげきハしげれどもなごり恋しき花の夕かげ」、女三のミヤを、よそ人に見奉るハ、かひなければ、ほのかにみし夕かげハなを恋しきと也。「ひといの心も」とハ、みすのつまよりかしハ木女三のミヤ見たてまつりし事を、侍従ハしらねば、たゞよのつねのながめとおもへる也。(88)

一、「おまへに人しげからぬ」とハ、女三のミヤに人まなれば、此ふミみせたてまつりて、かしハ木の、わすれぬさまにの給ふこそわづらハしけれときこえて、「心ぐるしありさま」とハ、かしハ木の、かくの給ふ心を見給ひあまりてもししのびくにかしハ木をひきいれ侍る心もやあらん、ミづからの心ながらしりがたきと、侍従きこゆ

る也。

一、いとうたてある事をもいふかなと、なに心なげにの給ふ也。ふミひろげたるを御らんず。みもせぬといひたるを、「あさましかりしみのつまおほしあはせて」とハ、ねこのつなひきたりし夕おほしあハするに、おもてあかみて、「おとゞの」とハ、源氏の、さばかり、ことをつゐでに、大将にみえ給ふぞと、いはけなきありさまなれば、とりはづして、みたてまつるやうもあらんと、いましめ給ふ物を、夕ぎりの、みすのつまをねこのつなにてひきあげたるとかたり給ひなば、いかにあはめ給（80ウ）はんと、人のミたてまつりけん事をばおほさで、まづはゞかりきこえ給ふ心のうちぞおさなかりける。

一、つねよりも御さしいらへなければ、かしハ木より御ふミのまいる時、御いらへありしにと、侍従おもへる也。しゐてかへしかき給へと、きこゆべきことならねば、ひきしのびて、れいのやうにかく也。

一、ひとといハつれなしがほをめぎましう、まりの時かしハ木物おもひなげなりしを、いかやうなる事の給ふぞと、心ゆるしきこえざりしと也。「みずもあらぬやいかに」とハ、かしハ木の、みすのひまより見給ひたることを、侍従ハしらねば、たゞをしあてにかくの給ふとおもふ也。「あなかけくし」とハ、女三のミやに心かけ給ふハ、おほけなきとぞ、さうにはしりがきたる也。

一、「いまさら色にないでそ山（80オ）ぐらをよバぬえだに心かけきと」
（80オ）中くおほけなく女三のミやに心かけ給ふと、ないろいでくの給ひそ、かひなき事と也。引哥、しら雲とミゆるさくもある物をよバぬえだとおもハざらなん。（80ウ）